
さんかく + 1

土はサムライ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さんかく+1

【Nコード】

N4253P

【作者名】

土はサムライ

【あらすじ】

不器用な恋愛しかできない継太と悠希。繰り返し見る奇妙な夢に悩まされる心優。三人の高校生に起こる不思議で少し危険な物語。

さんかく+1

はらりはらりと桜の花びらが舞い散る遊歩道を学校帰りの竹内^{けい}継太はのんびり歩いてた。満開宣言が出されたのがちょうど一週間前。左右にずらりと並んだ桜木は、うっとりで見とれてしまうほど美しい桜吹雪を散らし、歩道の上を桜色に染めていた。

時折、継太は立ち止まって制服や髪の毛に付着した花びらを手で払いながら木々を見上げた。春の風物詩とも言える幻想的な景色に身を置いていると、日常の悩みなどすべてちっぽけなことのように思えてきた。

家まであと少し、そろそろ遊歩道から外れなければならない。そう思ったとき前方のベンチに腰掛けて、分厚い本に目を通して髪^{かみ}の長い少女にふと目が止まった。

ひととき小さな顔には、中学生の幼さが残っているが、着ている制服はおそらく高校のものだろう。緑のブレザーに、スカートは濃い青と淡い水色のチェック柄で、真っ白なシャツの前襟に結ばれた胸のリボンはスカートと同色だ。

制服には皺一つなく、見るからに新品だ。おそらく新一年生だろう。もしかしたら、継太が通う高校と同じく、彼女の高校も今日が入学式だったのかもしれない。ブレザーの左胸部分には、校章が金色で刺繍されているが、五メートル以上の距離と少女が真剣な表情で読んでいる本が邪魔してよくわからなかった。しかし、どこか見覚えのある制服だ。確か。

記憶の回路がつながる寸前で、ふと少女が本から視線を上げて、継太の方を見た。

目があった瞬間、少女はがたと激しい音がするほど勢いよくべ

ンチから立ち上がった。

何事かと驚いて、継太は肩を強張らせて少女の様子を窺った。

すると、少女の顔がみるみるうちに青ざめていき、一歩二歩と後ずさりを始めた。その脚は小刻みに震えている。

誰がどう見ても異常な状況に、継太は身を固くして後ろをがばりと振り返った。考えられることは一つ。自分の背後からなにか危険なものに迫っているのではないか、と思ったからだ。しかし、危険物どころか、人っ子一人いなかった。桜の花びらが舞う穏やかな景色と、近所の公園から子供たちのはしゃぐ声が微かに聞こえるだけだった。

継太は、とりあえずほつと胸を撫で下ろして前に向き直ったが、少女の真つ青な表情と恐怖に支配された体の震えは変わらぬままだった。そして、気づく。少女の真つ黒な大きな瞳に映っているのは継太だけであることに。

つまり、恐怖の対象は継太自身なのだ。

もちろん、初対面の少女にこれほど恐がられる覚えなどまったくない。制服のことを少し気にしていただけで、けっしていやらしい目つきで見ていたわけではない、と断言できる。

少女は、とうとう目に涙をいっぱい溜めて、きゅつと唇を結ぶと、体を反転させて、全速力で駆け出した。その光景はまるでホラー映画のヒロインが殺人鬼から必死に逃げるワンシーンさながらだった。遠ざかっていく少女の背中を見ながら、継太は、ぽかんとその場に立ち尽くしていた。

どうして？

しばらく頭を捻ってみても、思い当たる節がやはり見当たらない。まったく酷い話だと憤慨する一方、わけもわからず女の口から逃げられるという現実にはショックだった。

気がつくのと、頭の上には儂く散った桜の花びらが積もっていた。

継太は、両手のひらで顔をゴシゴシ拭いた。これ以上考えても仕方のない。顔に虫でもへばりついていたのでだろうと、無理矢理気持ちを切り替えて、ベンチの前を通り過ぎた。

背の高い白亜の壁に囲まれた豪華な建物の角を曲がった二軒先が継太の家である。二階建ての庭付き一戸建てと言えば聞こえはいいが、実際は築三十年以上の借家だ。

玄関前には、古さをごまかすために最近黒く塗り直したばかりの開き戸を設置しているのだが、その前に立つ人影に継太はぎよつとした。

先ほど逃げていったばかりの少女が、身を隠すように背中を丸めた格好で、開き戸の隙間から中の様子をうかがっていたのだ。

まさか、泥棒……？

継太はかぶりを振って自分の考えを即座に否定した。盗みに入らなすく隣り近所にある金持ちの家を選ぶはずである。

「ねえ、ちよつと」

継太の声に、少女は「ひっ」と嗚咽を漏らしてから怖々と顔を向けた。

「ここ、俺の家だけど、何か用？ 親父は仕事だし、いまは誰もいないよ」

精一杯の優しさと穏やかな声で問い掛けたつもりだが、少女から答えは返ってこなかった。

継太が一步家に近づくと、少女は一步後ずさりをする。二歩進めば、二歩下がる。二人の間には、五メートルほどの距離が常に作られていた。おそらく無理矢理距離を縮めてしまえば、また少女は逃げ出してしまうだろう。

まるでコントだと思って、継太は頭を掻いた。これじゃ、埒がわからないと諦めかけたときだった。

「あ……あ……」

唇を震わせながら、声にならない声で少女がなにかを言おうとしている。

「なに？」僅かな変化を逃すまいと、顔を突き出した。

だが、その反応が少女に恐怖を与えてしまったらしく、再び「ひいつ」と声を上げた。

しまった、また逃げられる。と継太は唇を噛んだが少女は逃げ出さなかった。体は相変わらず震えているが、どこか我慢してその場に止まっているようにも見えた。

きつとなにか言いたいことがあるのだ。ここは辛抱強く待ってみようと思ったときだった。

「な、なまえ……を、お、おし」

と喉の奥から絞り出したような掠れた声で言うと、あとは言葉にならずに苦しそうに息を呑みこんだ。

継太は、自分の顔を指差して、

「え？ 俺の名前？ それなら、竹内継太だけ……」

少女から血の気がさーっと引いていくのがわかった。胸の前で腕を交差させて抱えていた本をぼとりとその場に落としたが、一向に拾おうともしない。

「お、おい！ 本が汚れる」

継太が慌てて、落ちた本を拾おうと駆け寄ると、少女は溜めていたものを一気に吐き出すかのように甲高い悲鳴を上げて、屈んだ継太の脇をすり抜けて走り去って行った。

「なんだよ、一体？」

耳鳴りが治まってから拾い上げた分厚い本の表紙には『脳科学から読み解く夢の構造』とあり、なんとも小難しそうなタイトルに継太は口をへの字に曲げた。土埃を払いながら、背表紙を向けると、下部にバーコード付きのシールが貼ってあった。顔を近づけて、そこに書いてある白抜きの小さな文字を読んでみてわかった。この本は世田谷区の図書館で借りられたものであるようだ。

個人のものならまだしも図書館で借りたものとなれば、放って置くわけにもいかない。しかし、今から少女を追いかけても、角を右に行ったのか左に行ったのかさえわからない。面倒だな、と感じつつも明日学校の帰りにでも寄って返却してやろうと思った。どうせ放課後は暇なのだから。

継太は、ふと頭に浮かんだ「暇」という感覚に一つため息を吐いて、開き戸のノブに手を掛けた。

「継太！」

突如、鋭い棘のある声を背中に突き刺されて、思わず体をピンと硬直させた。

「あなたなにやってんのよ」

振り返ると、同じクラスの早坂悠希はやさかゆうきが左右の腰に手を当てて仁王立ちしていた。眉間に三本の縦皺を刻み、目つきは鋭く射るようで、誰がどう見てもお怒りの状態だ。

その怒りの原因が自分にあることはおよそ察しがつくものの、ここで下手に出ては絶対にダメだ、と自分自身に注意を促した。少しでも弱気になれば、調子に乗って畳みかけられることはわかりきっている。

「なにやってるって、それはこっちのセリフだ。大事な新入生の勧誘はどうしたんだよ？」

制服姿であることから学校からここまで直行してきたのだろう。

入学式後の部への勧誘活動は絶好の機会で、三年生の、しかも部長である悠希がここにいていいはずがない。

だが、その指摘に悠希はまったく怯んだ様子を見せない。

「ちゃんと二年生がやってくれてるわよ。この裏切り者が！」

「裏切り者だと？」

継太の右眉がぴくりと動いた。

「裏切り者に裏切り者って言ってなにが悪いの？」

「いいわけないだろ。勝手に人を悪人扱いするんじゃないよ」

「うわっ、汚い。顔近づけないでよ、ツバが掛かるじゃない」

悠希は両手を使って顔の前を防ぎながら言葉をつなげた。

「なにが勝手によ。じゃあ、これは何なのよ！」

悠希は肩に提げていた鞆から茶色の封筒を取り出して、継太の眼前に突きつけた。

中央に「退部届」と書かれたその封筒は、つい一時間前に継太が、水泳部の顧問に渡したものだっただ。

「なんでそれを悠希が持つてるんだよ？ 返せよ」

継太は封筒を奪い取ろうと右腕を振ったが、悠希はさっと手を引いて引いてかわした。

「残念でした。退部するには、部長の承諾も必要なのよ。あたしは継太の退部は認めないからね」

すっかり忘れていた。男子の部長が退部する場合は、女子の部長が承諾権を持つのだ。去年の九月、三年生が引退した直後に、継太と悠希はそれぞれ新部長になっていた。

悠希は腕を組んでぐっと下唇を噛んでから、これまでとは一転して低い声で言った。

「継太はただの部員じゃなくて、部長なんだよ。これ以上の裏切り行為はないじゃない。部員が一人減ることがどれだけ支障をきたすか、わかってるでしょ？」

それは痛いほどわかっている。男子七人、女子は四人しかない水泳部はここ数年存続の危機に陥っているのだ。

水泳をやると、日焼けをして肌に悪い、シミができる、肩幅が広がって洋服が似合わなくなる、水着が恥ずかしい。年頃の高校生には負のイメージがてんこ盛りな上に、見た目以上に練習はハードなわけだから、どうしても部員を増加できないでいた。

部員数と比例して、学校から部費が下りるシステムでは、プールの維持費を賄うだけで手一杯の状態だった。部員がこれ以上減るとプールの維持すら困難になりかねない。

「仕方ないだろ……医者からも泳ぐなって言われたんだから」

継太は噛み殺すように言った。水泳肩と呼ばれる右肩の怪我が原因で、泳ぐたびに強い痛みが走るようになってしまったのだ。これ以上ひどくなると手術が必要だと言われ、先日ついにドクターストップが掛をかけられた。

「それでも辞めることないじゃない。泳げなくてもマナージャーと

かできることはいくらでもあるでしょ」

「マネージャーなら相良さんがいるんだぞ。無茶なこと言うなよ」
何年か前に、ある部が部費を得るために選手よりも多くのマネージャーを入部させる、という事件があった。再発防止のためマネージャー数は制限され、水泳部の場合は一人のみ、という決定が下った。まかりなりに部長を務めていた自分が、率先して規則を破るわけにはいかない。

悠希は地団駄を踏んで、

「ほんと弱い。たったあれだけの練習で壊れる肩も肩だけど、一番弱いのは継太の性格だよ。あたしなら絶対になんか方法見つけて、部に残るわ」

と吐き捨てるように言った。

「ああ、もういいや。バカらしくなってきた。やっぱり新入生を勧誘するべきだった。ほんと時間を無駄にした」

これみよがしに言う悠希に、継太は背中を向けて開き戸を押した。
「裏切り者の俺が言うのもなんだけど、三組に一人、水泳やってそ
うな男子がいたぞ」

ふん、と鼻を鳴らした悠希は「そんなこととっくに気づいてるよ」と一蹴した。

「それじゃ、話は終わりだな」

「辞めるなら、あたしの目の前で針千本飲んでよね」

「はあ？」戸を閉めるために向き直った継太は、悠希のわけのわからない発言に眉根を寄せた。

「なにガキみたいなことやってんだよ」

肩を竦めてみせると、悠希は殺気じみた目で継太を睨んだ。これまでも、練習方針などを巡って何度も言い合いをしてきたが、これほど恐ろしい目つきは初めてで、背中に寒いものを感じた。

「あたしは、竹内継太という人間を完全に見損ないました。二度とあたしの前に現れないでください。以上！」

大量のツバを飛ばしてから、悠希は身を翻してすたすたと継太か

ら離れて行った。

「……ふつうそこまで言うか？」

悠希の姿が見えなくなったところで、継太はため息混じりに呟いた。

言いたいこと言いやがって。部を辞める決心をするのにどれだけ悩んだと思ってるんだ。

腹立たしく思いながらポケットをまさぐって鍵を取り出した。

玄関のドアに鍵を差し込みながらふと思う。

「二度と現れるなって……同じクラスなんだから絶対に無理だろ」

昼休みを告げる鐘が鳴って、継太は今朝作ってきた弁当を机の上に広げた。クラス替えが行われてまだ日が浅いせい、休み時間の教室はどことなくみなよそよそしい。

とくに女子は、一緒に弁当を食べる仲間を早いところ見つけることがクラスに馴染む上でかなり重要らしく、お互い遠慮がちに声を掛けてから机を向かえ合わせて弁当を広げる、といった具合に、高校生活最後の友達作りに勤^{いそ}しんでいる。

そのへん男子は気楽なものだ。一人黙々と弁当をつついていても友達がいない孤独でかわいそうなヤツだなんて思われることはないむしろ、男同士が四人も五人も集まって一緒に弁当を食べている光景の方が気持ち悪いだろう。

部活を辞めたことを考慮して、半分に量を減らした白飯を頬張っている、突然赤い箸が伸びてきてひよいとおかずをさらっていった。

「おい！」

視線を上げると、口をもぐもぐさせている悠希が机を挟んで目の前に立っていた。盗まれたおかずは、鰹節をたっぷりかけたたけこの土佐煮だった。

「なにすんだよ！」

悠希はごくりと飲み込むと、軽く目を閉じてうーんと唸った。

「思ったよりおいしい………けど少し甘みが強いな。砂糖入れすぎなんじゃない？」

「誰も感想なんか訊いてない。人様の大事なおかずをなんで断りもなく食べたのかを訊いたんだよ」

茹であがったタコのように顔中を真っ赤にさせた継太とは対照的に、悠希は白々とした視線をすっと横に逸らして、

「大声出さないでよ、みんな見てるよ」

とぼそりと言った。

「え？」

教室は水を打ったように静まり返っていて、全員が驚きを込めた表情で継太の様子をうかがっていた。

継太はばつが悪そうに自分に集まった視線に向かって首をすくめて謝った。

悠希とは昨日のことがあって、今朝から目も合わせていなかった。喧嘩はいつものことだが、「絶交宣言」をされただけに今回は少し長引くかと思っていた矢先に、ちよっかいを出してきたのだ。

怒らせることでクラスメイトたちに、あいつはキレやすい危険なヤツだ、とでも印象づけさせる、たちの悪いいたずらだろうか。

とりあえず悠希のことは無視して、弁当に箸を運んだ。すると、今度は眼前に黄色い弁当箱が突きつけられた。中身は、女の子らしいカラフルなおかずで彩られていて、ぱつと見た目ではプチトマト以外どんな食材を使っているのかさえもわからなかった。

「好きな選んでいいよ」

得意げな表情で悠希は言うのと、催促するように手にした弁当を戸惑っている継太の顔ぐいつとに近づけた。

「……いらぬよ。自分のだけで間に合っている」

「それじゃ、おかず交換にならないじゃない。継太が選ばないなら、あたしが好きな選ぶからね」

そう一方的に言うのと、悠希は継太の弁当箱へさつとおかずを入れた。ほたてだろうか、その上にふりかけられたパセリが色鮮やかで、焼き色のついたチーズとともに香ばしい匂いもする。

「早く食べて、さっきのあたしみたいに感想を言うのがルールなの。なにがルールだ。継太は聞こえよがしに鼻で笑った。

それなら、まずい、とはつきり言ってやろうじゃないか。継太は乱暴に一口でほたてを頬張った。

「ま　」開きかけた口が止まった。

一回噛んだだけでほたての甘さとオリーブオイルの香りが口中に

広がり、焼いたパン粉とチーズの香ばしさもまた絶妙だった。

「うまいよ、これ。簡単に作れる？」

酷評するつもりが、あまりのおいしさについて本当のことを言ってしまった。それどころか、今度作ってみたいとさえ思った。

「ふふん、それは内緒。じゃ、明日もおかず交換よろしく」

勝ち誇った顔をして、悠希は胸のところできっと手を振ると、廊下側の窓際で机を合わせている女子グループの席へと戻っていった。

まったく、絶交しているんじゃないのかよ。継太は誰にも聞こえない声でぶつぶつとひとりごちた。

「おい、なんだよ、今のは？」

突然、背中から勢いよく肩を抱かれ、危うく弁当を落としてしま
いそうになるほど前のめりになってしまった。首を横に捻ると面長
で鼻筋の通った顔が、息が掛かるほどの距離にあった。二年生のと
きから引き続き同じクラスになった道野だ。

「俺はしっかり見てたぞ。おかず交換ってなんだよ？」

道野はさらに継太の肩をぐつと抱き寄せて、口の端を上げた。

「知らねえよ、こつちが訊きたいくらいだ」

「嘘つけよ。早坂さんとは、中学から一緒なんだろう？ しかも、同
じ水泳部なんて怪しすぎるぞ、こいつめこいつめ！」

肩に回っていた腕は、いつの間にか継太の首をロックしてぐいぐ
い締め付けた。

「痛ててて！」

たまらず継太は顔を真っ赤にして首を引き抜いた。

「さすが水泳部。力強えー」

「もう水泳部じゃない。昨日退部したんだ」

まだ痛みが残る首筋を撫でながらぞんざいに言い放つと、道野は
「ほー」と眉を持ち上げた。まったく予期せぬ言葉だったらしく、

「まあ、あれだ、理由は訊かないけどさ、いろいろあったんだな」

などと明らかに困ったふうに残る髪を撫でながら適当なことを言
った後、継太の前にさつと回り込むと突如真顔に変化した。黙って
いれば二枚目といえなくもない。

「早坂さんてさ、彼氏いるの？」

「はあ？」と思わず継太は顔を歪めた。

その反応に、道野は不服そうに眉を寄せた。

「わかってないなあ。これだから子供は困るよ。早坂さんて結構人
気あるんだぜ」

「……そうか？」

継太は、悠希の方を一瞥した。すると、道野がぎよっとして「バカ見るな！」と短く叫びながら頭を押さえつけてきた。

継太はその手を払いのけてから箸を手に取った。

「で、どうなんだよ？」

改めるように、道野は机に腕をのせてぐいっつと顔を寄せてきた。

このままでは、邪魔で満足に食事もできない。

「俺が知っている限りじゃ、そういう類の話は一度も聞いたことがない。だいたい男みないなヤツだから、恋愛自体に興味ないんじゃないか？」

道野は、はあーと深く長いため息を吐いてから、額に手のひらを当ててかぶりを振った。

「恋愛に興味のない女の子なんてこの世にいるわけないじゃん」

「ふうん、そんなもんかなあ」

全然実感が持てずに継太は気のない返事を返した。

「とくにさ、最近髪を伸ばし始めただろ？ それでより魅力的になってるんだよね」

競泳には邪魔だからと口癖のように言って、真冬でもベリーショートを通していた悠希の髪がずいぶん伸びていることに気づいたのはつい最近のことだった。髪は耳に掛かり、後ろ髪は襟に届くまでになっていた。

「確認したいんだけど、竹内と早坂さんは、特別な関係じゃないんだよね？」

継太は一瞬頬を引き攣らせた。

「……そ、そんなわけないだろ」

道野はにやりと笑って、

「なんだよ、今の変な間は？ 本当のこと言わないと一生恨むからな」

と念を押すように言った。

「どうしてそこまで怪しむのか、こっちが訊きたいよ」

「当たり前だろ。堂々とみんなの前で、継太、悠希なんて呼び合ってる仲なんだから」

「だって、それは あ！」

最後の楽しみに残していたたけのこが、道野の親指と人差し指によつて主のもとから離れて行く光景に継太は奇声を上げた。

「また変な声出して。うん、うまい！ 竹内は料理の才能あるよ。いいお嫁さんになれるぜ」

一発肩でも殴つてやろうかと拳を作つたが、道野はさつと立ち上がつて距離をとつた。

「ごちそうさま。それに貴重な情報提供に感謝！」

背筋を伸ばして敬礼してみせると、すぐに背中を向けて逃げるように教室から出て行ってしまった。

結局、今日のメインだったたけのこを口にすることができずに継太は昼食を終えた。

特別な関係。

昼休みが終わろうとしているのに、その言葉が頭からなかなか離れなかった。考えてみれば、悠希は他の女子とは明らかに違う関係にあった。だが、それは道野が勘ぐっているような恋愛関係ではけっしてない。

弁当を鞆にしまいながら窓の外に目をやると、校庭の桜が宙空で乱舞していた。桜橋高校は、その名前が示す通り、ソメイヨシノや山桜といった桜の木が、学校中所狭しと枝葉を伸ばしている。強い風が散った花びらまでもさらって、継太がいる二階どころか屋上まで高く舞い上げていた。

早坂悠希と初めて会ったのも、今日みたいに風は強いが、春めいた暖かな日だった。

市の中心部から外れたところに建つ小さなスイミングスクールに、継太は三歳のころから通っていた。そこは無料の送迎バスが出ていて、幼い子供たちを引率付きで通わせてくれるサービスがあった。それを聞いた継太の父親は、幼稚園が終わった後の宅児所替わりに使おうと、物心ついたばかりの継太を通わせることにした。

というのも、継太が二歳のときに母親が不慮の事故で死んだからだ。居眠り運転をして、歩道に突っ込んだ軽トラックから通学中の小学生を守ろうとして犠牲になったらしい。そのお陰か、小学生たちに大きな怪我はなかった。母親が警察官だったこともあって、当時は美談として新聞にも大きく取り上げられたそうだ。

祖父母は、継太を連れて福岡に帰って来い、と父親を何度も説得したそうだが、けっして首を縦には振らなかった。わずか三年半の結婚生活だったが、それでも二人で過ごし、継太が生まれた家を離れることはどうしてもできなかった。だから、父と息子の二人が暮

らすには、今の家は広すぎると言っているほど広い。なにせ、子供は三人欲しいというのが、母親の口癖だったのだから。

とにかく、自分の意思とは関係なく継太は水泳を始めることになった。最初は水に顔をつけるのも怖かったのだが、継続は力なり、ということなのだろうか、スクールで一番の古株である継太は、途中から通い始めた歳の近い子供たちにはけっして負けなかった。どの種目でも圧倒的タイム差で一位。高学年になると、東京一大きなスイミングクラブへの移籍話まで出たほどだった。

だが、その年間費を示されて驚愕した。ジュニアオリンピック出場を見据えた合宿が一年に何度もあり、大会の遠征費だけでもバカにならないものだった。

竹内家の収入はもちろん父親の給料だけである。無駄に広い借家の家賃が家計を圧迫している状態で、とても払える金額ではないことくらい当時六年生だった継太にも容易に察しがついた。中学生になれば、無料ただで部活をすることができる。どうせなら、プロの道もある野球やサッカーをやってみたい、という気持ちが芽生え始めていた。そう思い始めると、水泳への情熱はどんどん冷めていき、小学校卒業と同時に十年通ったスクールを辞めることを決意した。

三月。何事もなく最後の練習が終わって、いつも通りバスに乗ろうと駐車場に出たとき、「おい」とやけに尖った声を掛けられた。

「お前、竹内継太だろ？」

あまりにぶっきらぼうな物言いに、継太は肩越しに振り返って睨みつけた。相手は、黒い上下のジャージ姿で、短く刈り込んだ頭に鼻筋の通った凛々しい顔つきをした少年だった。だが、気の強さが如実に顔に表れていて、いまにも継太に飛び掛かってきそうな殺気を醸し出していた。

「ちがう」

とだけ答えて、継太は少年から目を逸らして、バスに向かった。ここで変に相手をして、取っ組み合いの喧嘩になっても得することなどなにもないと思ったからだ。すると、少年は継太が肩に提げて

いたバッグを後ろから掴んで、

「ウソつけ！ここに名前が書いてあるじゃないか！」
と怒りを露わにした。

自分の持ち物には必ず名前を書くこと。

鍵付きのロッカーがないここでは絶対に守らなければならないルールだった。継太が愛用しているスポーツバッグにもでかかど竹内継太と黒マジックで書いてある。もちろん、水着やキャップ、ゴーグルも同様だ。

「めんどくさいヤツだな。なんだよ？」

「今日初めてお前の泳ぎを見た」

継太は眉根を寄せて、少年を正面から見据えた。

「お前もこの生徒なのか？」

少年は、そうだと答えた後、矢継ぎ早に言葉を継いだ。

「ここを辞めるって本当か？ 中学になったらどうすんだ？ 他のヤツらみたいに野球部とかサッカー部に入るんじゃないだろうな？」
言葉尻には批難が込められていたが、継太はあえて「さあね」と挑発的に答えた。仲の良い友達から熱心にサッカー部への入部を誘われていて、心が傾いていることを見透かされたようで気分が悪かったからだ。

少年は目つき鋭く、

「ここを辞めるなら水泳部に入れよ」

と刺すように言った。

「なんでお前に命令されなきゃいけないんだよ？」

継太は、バッグを掴んだままの少年の手を強引に振りほどいた。

「もうすぐバスが出る。じゃあな」

背を向けて、再び歩き出した。少年は小走りで追いかけてきて、継太の横で並んで歩きながら一方的にしゃべった。

「いいか、絶対に水泳部に入れよ。お前より絶対に速く泳いでやるからな」

その言葉に継太のこめかみがびくりと反応した。これまで歳の近

いスクール生に負けたことなど一度もない。それどころか、月一回行われるタイム会では、隣のコースで継太と一緒に泳ぐことをみな露骨に嫌がった。圧倒的な差をつけられて、せつかく自己ベストを出してもうれしさが半減してしまうからだ。

乗車口のステップに足を掛けたところで、継太は動きを止めて首だけを少年に向けた。

「お前、自分の名前くらい言えよ」

「早坂悠希だ。四月からお前と同じ中学に入る」

「……」

継太は無言でバスに乗り込んで、後ろから二番目、いつもの座席にどかっと座って窓枠に肩肘を突いて頬を支えた。

早坂悠希と名乗った少年は、バスが豪快なエンジン音を立てて動き出すまで、駐車場からじっと継太を見上げていた。

「あいつが早坂か……」

窓越しに流れる見慣れた景色を眺めながら継太は呟いた。

毎月発表されるタイムの順位表に早坂悠希の名前が上位に載るようになってしたのは、一年くらい前からだった。月が進むたびに着々と順位を上げていき、とうとう先月には、百メートルフリーの種目で継太に次ぐ二位のタイムを出していた。しかも、そのタイム差は約一秒。常に、他とは大差で一位の記録を保持していた継太が、これほど、二位のタイムと僅差になったのは初めての経験だった。周りは勝手に継太と早坂悠希をライバル関係に持ち上げて、話のタネに盛り上がったっていた。

「早坂が竹内を抜くのは時間の問題じゃないか？」

「竹内は最近あんまりタイムが伸びてないからあり得るぞ」

くだらない雑音だ。俺が負けるはずがない。と、継太は早坂悠希のことなどまったく相手にしていない態度を示しながらも、一体どんな泳ぎをするのか見てみたいという気持ちは頭の片隅にあった。しかし、二人の通う日が重なることはとうとうなかった。

それが、突然現れて、初対面など関係なくいきなり喧嘩腰で挑戦状を叩きつけてきたのだ。鋭い目つきは間違いなく本気だった。

去年の秋に学校見学の行事で訪れた中学校の古くて汚いプールと、いまにも壊れそうなプレハブ作りの部室が思い浮かんで、継太は口の片側だけで笑った。

そんな環境で、三年間、早坂悠希と勝負するのもおもしろそうだな、と思ったのだ。

四月になり、中学生になった継太は、サッカー部はもちろん陸上部やテニス部などの誘いをすべて断って水泳部に入部した。そこには当然、早坂悠希の姿もあった。

ただ、一つ大きな勘違いをしていたのは、悠希が男ではなく、女だったことだ。入部した初日、スポーツ刈りの頭にはあまりに不釣り合いなセーラー服姿に継太は仰天した。

悠希が女なら尚更負けるはずがない。スポーツにおいて男女の差は埋められないはずだった。しかし、悠希は他の男子部員よりもずっと速くて、人一倍練習熱心でもあった。そして、ことあるごとに練習メニユー終了後に、継太へ勝負を挑んでは、いつも僅差で敗れた。

だが、条件が同じ女子となれば、その速さはずば抜けていた。一年の夏から関東大会に出場して好成績を収めた。それは継太も同じで、一年、二年生時と続けて関東大会の決勝には残ったのだが、全国大会出場はあと一歩で叶わなかった。

そして、三年生からは二人ともそれぞれ部のキャプテンに任命された。

キャプテンになると、ただタイムを競い合っていればよかった二人の関係は変わった。練習メニユーを作るために、毎日真剣に話し合わなければならなかった。どうすれば、効果の高い練習ができるのか。伸び悩んでいる後輩たちをどうサポートするのか。お互い意見を出し合っても、結局まとまらずに、よく喧嘩にも発展した。喧嘩になれば、継太、悠希と呼び捨てにした。それがいつの間にか普段でも定着してしまった。

ある日、メニユー作成のふとした息抜きの雑談から悠希に父親がいないことを知った。

悠希が小学五年生の冬に癌で亡くしたらしい。一家の大黒柱を失った早坂母娘は、都心から家賃の安い郊外の都営団地に引っ越した。父親を亡くした悲しみから転校先では、なかなか友達ができなかったそうだ。一月以上掛かってようやくできた友達に誘われて、悠希はスイミングスクールに通い始めた。泳ぐことの爽快感に魅了されるのにさほど時間は掛からなかった。

継太は自分も母親を事故で亡くしていることを悠希に話した。父、母の違いはあれど、親を失っているという共通点は、二人だけの間に存在する何か特別なことのように思えた。だから何度ひどい喧嘩をしても明るる日には、何事もなかったかのようにけろりとしてい

た。

三年生の夏、二人は全国大会に出場する絶好のチャンスを得た。予選トップのタイムで関東大会の決勝レースに残ったのだ。

決勝でも継太の体はよく動いた。これ以上にならないほど調子がいい。一かき一かきがしつかりと水をとらえ、最後までぐんぐん加速していった。負けるはずがない。継太は誰よりも早くゴールタッチをした。

ところが、水からあがって、控え室に戻ろうとしたときに起こった妙な歓声を不審に思って、正面に掲げられた電光掲示板を振り見た。自分の名前の横に「失格」の文字があった。審判員から受けた説明では、フライングだった。

まさか、と継太は頭を抱えた。最高のスタートだったはずだ。フライングなんてなにかの間違いだ。抗議しようとしたが、顧問にきつく止められた。魂が抜けたようにして応援スタンドに戻った継太の目の前で、さらに信じられないことが起こった。

決勝の五コースを泳ぐ悠希のフォームがばらばらなのだ。息継ぎで顔を横に向けるたびに、体が後ろに流れすぎている。予選のときとはまるで別人の泳ぎだった。

結局、二人とも全国大会への切符を手中にすることはできなかった。意気消沈して、帰りの電車で揺られた。中学校の最寄り駅で、顧問から励ましの言葉を受けて、解散になった。

二人はとぼとぼと細い裏道を歩いた。通学路ではあるが、夏休みの午後六時近いこの時間では、人通りはほとんどなくひっそりしていた。

「あーあ、明日からは受験勉強かー」

レースが終わってからずっと無言だった悠希が突然気だるそうに言った。そう、どんなに悔やんだところで、水泳部は引退なのだ。早いところ気持ちを切り替えるしかない。継太は無理にでも意識して顔を少し綻ばせた。

「まあな。でも、悠希は私立から声が掛かってるんだろ？」

水泳の強豪で知られる私立高校、それも複数から推薦を受けていることを継太は知っていた。

「継太は、桜橋ねらうの？」

「うちは、私立に行く金はないから。どうせ都立行くなら桜橋かなって」

「継太ってそんなに勉強できるんだっけ？ 桜橋目指してる他のコたちってみんな塾行ってるよ」

「知らなかったのか？ けっこう頭良いんだぜ」

「ふーん」と鼻で笑った後、悠希はいとも簡単に「じゃ、あたしも桜橋にしよう」と言い放った。

「おい、本当に桜橋のレベル知ってるのか？」

「継太こそあたしの成績知らないでしょ？ それにまだ半年もあるのよ。よゆうよゆう」

悠希とは違って、三年生になった直後から勉強の時間を増やしていた継太は少しむっとした。先月の模試では、まだ桜橋高校の壁は高く険しかった。

「なに怒ってんの？」

継太の顔色の変化を目ざとく見つけた悠希は、下から顔を覗きこ

んだ。

「べつに」

夕陽に照らされ、オレンジ色に染まった悠希の顔から顔を逸らし、継太は歩くスピードを上げた。

「こら、あたしを置いていくな！」

後ろから小走りで駆け寄ってきた悠希に、左腕をぎゅっと掴まれ、継太は「痛てっ！」と顔を歪めた。

「大げさね。ちょっと掴んだだけじゃない」

「ちよつとじゃないだろ。しっかり力が入ってるだろうが。ん？」

歩を進めようとしても、継太の体が動かなかった。悠希がまだ継太の腕に両手でしがみつくようにしているからだ。振りほどこうと腕を少し動かしたとき、女性だけが持つ柔らかさを感じて、継太の動きは固まってしまった。顔は相変わらず少年のようだが、こころ、二年で体はすっかり女らしくなっていた。これまで、あえてそれを意識しないようにしてきたのだが、実際に触れてしまうと、心臓はパニックを起こした。

「なんで、あたしが私立にじゃなくて、桜橋に行きたいのか、訊かないの？」

悠希はじつと見つめてきたが、継太はとても顔を合わせられなかった。赤くなつた顔を絶対にバカにされると思ったからだ。

「どうせ、また俺に勝ちたいからだ、とか言うんだろ。安心しろ、桜橋の水泳部でまた勝負してやるから」

悠希は口のへの字にした。

「んー、半分正解」

「半分？」

「継太とまた三年間一緒にいたいから」

「え？」

意味がわからず、思わず継太は悠希の顔を振り返ってみた。すると、オレンジ色だった彼女の顔が、いまは真っ赤に染まっていた。

「もっ！」

悠希はもどかしそうに、掴んでいた継太の腕をぐいっと引っ張った。

継太はバランスを崩して、体が悠希の方に傾いたところに、突然頬にぬくもりのある柔らかさを感じた。

「あ……いま……何した？」

本当に何が起こったのかわからず、戸惑いを隠せなかった。一方、悠希は顔を俯かせたまま、

「……約束しようよ。絶対に桜橋に受かって、インターハイ目指すって」

と確かめるように言った。

「う、うん」

継太は、わけもわからずただ反射的に頷いた。

「約束したからね！」

振り払うようにして、悠希は継太の腕を離すと走って路地の角へと消えていった。

二人は必死に勉強して、見事、桜橋高校に合格した。とくに受験直前の悠希は、なにかに取り憑かれたように勉強していたから、喜びもひとしおだった。

約束通り、二人は水泳部に入部した。

だが、一年の夏の終わり、継太は泳いでいると、右肩に鈍い痛みを感じるがあった。単なる筋肉痛だろうと放って置いたが二年生になっても痛みは消えなかった。当然、タイムは伸びず、インターハイ出場に必要なタイムには程遠かった。昨年末、いよいよ日常生活の中でさえ、痛みを感じ始めた。深夜に痛みで目を覚ましてしまふこともあった。さすがにまずいと感じて、病院の門をくぐった。そして、言い渡された診断結果は最悪だった。腱板損傷、インピンジ症候群。別名、水泳肩とも呼ばれる肩の深層筋が損傷している状態インターマッスルで、とにかく泳ぐのを止め、安静にしていることが最も有効な治療法だということだった。

インターハイ出場の目標を失って、継太は水泳部を辞めることを

決意した。そう、マネージャーの問題なんてただの言い訳だ。思うように泳げなくて、無気力な状態を部員の前に晒してしまうのが怖いのだ。

針千本飲んでよね！

悠希との約束は守れなかった。でも、彼女が本当に怒っているのは、水泳部から逃げた気持ちの弱さを見透かしてのことかもしれない、と継太は思った。

継太は窓を少しだけ開け、そこから右手を外に出して、風に舞う一枚の花びらを握った。

広げた手のひらの上で、桜色と白色の絶妙なコントラストを見せる小さな花びら見て、散ってもなお美しい桜をうらやましく思った。

放課後、継太は学校の図書室に二台だけ設置してあるパソコンを使って、世田谷区の図書館を検索した。昨日少女が落としていった本を返すためだ。

ホームページに載っていた地図をノートに描き写して、学校を出た。図書館のある世田谷区は、継太の住む西南市とは隣接していて、途中電車を一本乗り換えるだけだった。遅くても五時前には着けるだろう。

最寄り駅から歩くこと五分、迷うことなく目的の図書館に着いた。東京二十三区の中で最も人口の多い世田谷区の図書館だから、豪華な建物を想像していたのだが、意外にも古くて、白壁はどこどころ黒いシミが目立っていた。

まあ、区立だからこんなものか、と思いながらスロープを下って自動ドアを通った。

出入口すぐに、真っ白なカウンターが奥に向かって伸びていて、天井から「借りるところ」「返すところ」と大きく書かれた札が天井から垂らされている。

一応、落とし物です、と断ってから返却したほうがいいだろうか、と考えながら返却用のカウンターまで歩いた。

大量の本にバーコードリーダーの赤外線を当てているエプロンを掛けたおばさんが、継太に気づいてにこりと笑った。

継太は「こんにちは」と言ってから、少女が借りたであろう本を返そうと鞆の中に手を入れた。

「すみません、本当にすみませんでした」

一番奥のカウンター端から悲愴な声かふと耳に届いて、継太は視線を向けた。

緑色のブレザーを着た少女が、館員と思われる中年男性に、長い

黒髪を垂らして何度も頭を下げ謝っていた。継太の位置からは少女の後ろ姿しか見えないが、制服と髪型も昨日の少女と一致している。まず同一人物で間違いないだろう。

「あのう……」

継太はそつと近づくと、頭を下げ続けている少女の斜め後ろから遠慮がちに声を掛けた。

振り向いた少女は「あっ」と手のひらで口をふさいだが、継太がひよいと顔の横に掲げた本を見て、

「そ、それ！ あ、あたしのです。あたしのなんです！」

と興奮の面持ちで、声を詰まらせながら叫んだ。

中年の館員が慌てて「しーっ！」と人差し指を口元に立てて顔をしかめると、少女はまた長い髪を垂らして、ごめんなさいと謝った。

「今日は逃げないんだね」

継太は笑顔で椅子に腰掛けながら言った。

「逃げると、その、また怒られるんで……」

伏し目がちにぼそりと漏らした言葉に、継太は「え？ 誰に？」

と前のめりになって訊いた。すると、少女は慌てて胸の前で手を左右に振って、

「え、いや、な、何でもないです！」

とごまかすように言って、継太の真向かいの席にちょこんと座った。

図書館にしては珍しく、ここの二階の奥には「談話室」が設けられていて、そこではおしゃべりや飲食も認められていた。といっても、談話室を囲むのは、壁ではなくパーティションだから、会話は漏れてしまうし、置かれている机や椅子も一般の読書スペースのものに比べると傷だらけで古いものばかりだ。そのため、お世辞にも居心地が良いとは言えない。実際、いま談話室を利用しているのは、継太と少女の二人だけだった。

少女はかしくまるように両肩をすぼめている。最初会ったときか

ら小顔の印象はあったが、改めて見ると、目を疑いたくなるほど小さい。継太が手のひらを広げればすっぽり入ってしまうくらいだろう。それに対して、左右の瞳は大きく、いま目の前にいる継太の姿をはつきりと映し出している。胸元まで伸びた黒髪は、館内のそう明るくもない照明の中でさえもきらきらと白く照り返していた。

ああ、大和撫子って、きつとこういうコのことを言うんだな、と継太は一人で納得した。

「あ、あの、本を届けていただいてありがとうございます」
か細い声で申し訳なさそうに言う少女に、継太は首を素早く左右に振った。

「たいしたことじゃないよ。どうせ暇だから」
「でも、ここっってお家とは逆方向じゃないですか。本当に申し訳なくて」

「いいのいいの。そんなことより、何で昨日は家の前いたの？ 気になって仕方ないんだけど」

「それは、その……」

少女は口を噤んで俯いてしまった。

そんなに言いたくないことなのだろうか。空気がいつそう重くなつたのを感じて、困ったなあ、と継太は頬を指で搔いた。

「じゃあさ、名前くらいは言えない？」

「はい」少女は顔を少しだけ上げて、ゆっくりと「コウノミュです」と名乗った。

「コウノさんだね」

「あ、コウノは、香るに、野原の野と書きます。ミュは心に優しいです」

と聞いてもいないのに、途端に早口で漢字の書き方を説明した。その必死さがおかしくて継太はぶつと吹きだした。おそらく、これまで何度も「河野」と間違えられてきた経験があるのだろう。彼女の真面目さが垣間見えた気がした。

「わかった、ありがとう。俺は竹内継太　　って、そういえば昨日

言ったよね？」

「……はい。わたしから伺いました」

「それじゃ、継太のケイは継続の継で、タが太いってのは知ってた？」

香野心優は少しだけ笑って、首を振った。初めて見た笑顔に継太はほっとした。次の話題は、すでに決まっている。見覚えはあるが、思い出せそうで思い出せない制服についてだ。

「香野さんは高校生だよな？」

「はい。昨日入学したばかりですけど」

やはり新一年生であるという予想は的中していた。だが仮に、中学生です、と言われていれば信じてしまっていただろう。それほど香野心優は幼く見えた。

「高校はどこ？ あ、俺は桜橋高。うちも昨日入学式でさ、三年生は出席しなきゃいけないから、昨日はその帰りだったんだよな」
継太は質問しておきながら、咄嗟に自分のことを早口でしゃべった。昨日、顔を見るなり逃げられているだけに、一方的に質問するだけではまずいと思ったからだ。

継太の機転が利いたのか、心優は安心したようにこくりと頷いた。
「そうだったんですね。わたしは、聖華女子です」

「あー！」

継太は目と口を大きく縦に開けた。そうだ、聖華女子の制服だ。

御茶ノ水に門を構える聖華女子高等学校は、偏差値七十を超える進学校で、その名前は東京だけではなく全国にも轟き、毎年、東大・京大をはじめとした難関大学へ多くの生徒を輩出している。当然、エリートの証である校章や制服も有名だ。

「へえー、頭良いんだね。聖華女子かあ。すごいなあ」

あまりに感心しすぎて、継太は無味乾燥な言葉をため息に混ぜた。
「いえ、違っんです」

突然、強い調子の否定に継太は眉を持ち上げた。

「違っって……何が？」

心優は、視線を左右に泳がせた。何か迷っているようだが、やがて下唇を噛むと継太の顔を真っ直ぐ見据えて話し始めた。

「わたし、これからおかなしなことを言います。でも、全部本当なんです。もしかしたら、わたしの頭がおかしいだけなのかもしれません。それでも継太さんには、聞いてもらいたいです」

「あ、はい」

継太はよく理解できないまま頷いた。心優から尋常ではない覚悟と気迫を感じたからである。

心優は一つ一つゆっくりと確かめるように言葉をつないでいった。「去年から、わたしの頭の中に、別の人の声が聞こえるようになったんです。確か、模試の成績が思うように上がらなくて悩んでいたころだったので、八月ぐらいからだったと思います」

「別の声って、つまり幻聴ってこと？」

「最初は気のせいだと思っていました。でも、テストの最中に、それはつきりと聞こえるようになったんです。『答えは、ウだよ』」「そこは、中点連結定理を使えばいい」『時制に気をつけて』といった感じで、別人の声が頭の中に響くんです」

継太は眉根を寄せた。そして、当然浮かんでくる疑問を口にする。「で、その答えは合ってるの？」

心優はこくりと頷いた。

「すべて正解なんです。それで、成績がどんどん上がって行って、塾の先生から聖華女子を薦められるまでになりました。だけど、わかってたんです。本当は、わたしにそんな実力はないってことを。でも、親も喜んでるし、後には引けませんでした。もしかしたら、わたしは病気かもしれない、頭がおかしくなったのかも、そんな疑問はすべて忘れて、もう自ら進んで、答えを頭の中の別人に訊ねるようになりました。お陰で、合格することができました」

天の声、奇跡、超能力、不思議なエピソードはテレビや本でよく耳にするが、本当に体験している人が目の前にいるとは。だが、素直に信じていいものかどうか判断に迷った。

「すごい話だね。でも、それはカンニングとは違うんじゃないかな？ 罪悪感を感じたり、自分を責めたりすることはないと思うけど」心優は暗い表情で、視線を落とした。なぜ、それほど落ち込んでいるのか継太にはわからなかった。病気の不安はあるにせよ、天下の聖華女子に合格することができたのだ。端から見れば、うらやま

しい限りだ。

「問題はその後なんです。合格発表の直後から、頻繁に同じ夢を見るようになったんです」

夢？

今度は予知夢を見るようになったと言っても言うのだろうか。そういえば、彼女が落とした本に、夢がどうのこうのと書いてあった。

「本当にリアルな夢なんです。小田急線の電車に乗って、桜橋駅で降りてから、北口を左へ、小さな商店街と細い路地を抜けて、左右に桜の木が並ぶ遊歩道を歩いて、それから……」

継太は、ごくりと音を立てて唾を呑みこんだ。自宅への道順とまったく同じなのだ。

「まさか、それで昨日、君は……」

心優は、申し訳なさそうに頷いた。

「夢の中だと、制服を着た継太さんが家の中から出てくるんです。そこで、いつも目が覚めるんです」

「俺が、君の夢に出てくる？」

「はい、はっきりと顔がわかるくらい。それで、夢から覚めた直後に『タケウチケイタに会え』って声が、必ず聞こえるんです」

「そ、それって、つまり」

自分の名前が突如登場して、声がどもってしまった。継太は一度咳払いをしてから、話を整理しようと試みた。

「つまり、答えを教えてくださいました別人が、同じ夢を見させていて、しかも、俺に会って命令している　ってこと？」

心優は両肘を突いて、苦しそうに頭を抱えた。

「そこまではわかりません。でも、声の感じは一緒なんです。何度も同じ夢を見て、継太さんの家に行けって、声が聞こえてくるんです」

今にも泣き出しそうな心優を目の当たりにして、継太は焦った。

「ほら、深層心理とかよく言うじゃない？　無意識のうちに脳が覚えていたんだよ。だから、テストでも答えが浮かんできて、それを

別人の声みたいに聞こえたとか……ないかな？」

最後の方は完全に尻すばみになってしまった。心優が、それはない、と話の途中から力なくかぶりを振っていたからだ。

「桜橋には行ったこともありませんでした。昨日初めて行って、夢で見た風景とまったく同じで本当に驚きました」

「でも、最初は家の前じゃなくて、ベンチにいたよね？」

「遊歩道に出たところで、緊張の限界でした。それにすごく怖かったです。歩けなくなってしまって」

そして、夢で見たまんまの継太が現れた。

そりゃ怖いわけだ、と納得して、椅子の背もたれに体を預けた。

聖華女子に受かるまでのエピソードはおもしろく聞けたが、自分のことが出てきたとなると、やはりいい気味はしなかった

頭を抱えたままでいる心優を見て、嘘を吐いているとは到底思えなかった。とはいえ、本当に信じてしまっただろうか。

「やっぱり、信じてくれませんかよね？」

弱々しく震える声で、凶星を指された継太は慌てて背筋をピンと伸ばした。まさか、心まで読み取られているのか、と一瞬バカな考えが頭をよぎってしまった。

「いや、そんなことはないよ。でも、ほら、俺は至って普通の高校生だし、君に危害を加えるなんてこともないと思うんだ。だから、そんなに怖がらなくてもいいんじゃないかな？」

無責任極まりないことを言っているのは重々承知の上だが、それ以外に言葉が見つからなかった。

「……はい、継太さんがすごくいい人で、本当に安心しました。それに、今日、こうしてお話もできましたから、もう夢は見なくなるかもしれないですね」

言っていることは前向きでも、声に力はなかった。どこかでわかっているかもしれない。これでは、何も解決していない、と。

「そうなれば、いいね」

話を合わせるように、継太は笑ってみせた。すると、心優の頬も

僅かに緩んだ。継太は少しだけ安堵した。暗く考え込むよりも、無理にでも笑った方が、落ち着くというものだ。

図書館からの別れ際、心優は決意したように言った。

「やっぱり、一度病院に行ってみます」

「うん、それが一番かもね」

「自分だけじゃなくて、継太さんみたいに他の人にも迷惑を掛けるかもしれないと思ったら、徹底的に治療しないといけないと思ったんです」

「迷惑なんかじゃないよ。でも、顔を見られただけで、逃げられたのはちょっとショックだったけどね」

「本当にごめんなさい！」

冗談半分で言っただつもりだったが、心優はあたふたして、何度も継太に向かって頭を下げた。

「やめてくれよ、そんなに謝らなくていいから」

本当に生真面目なコだ、と思っただけで継太は苦笑した。

桜の花も全部散ってしまって、気がつけば四月も終わろうとしている。新年度最初の月は、あつという間に過ぎていくものだ、と今年もまた実感した。

香野心優のことはずっと気になっていた。病院で検査してもらったのだろうか。経過を知りたかったが、連絡先は聞いていない。無事治ったのならそれでいいのだが、頭の隅にしこりが残ったみたいで、けっして気持ちのいいものではなかった。

だが、数日前からそれ以上に、気掛かりなことがあった。悠希のことだ。昼休みに毎回「おかず交換」を強制してきて、そのたびに味付けを酷評するものだから、口ゲンカに発展することも何度かあった。最初は、激しい言い合いに心配していたクラスメイトたちも、最近「夫婦喧嘩」と名付けて、むしろ茶化すようになっていた。

しかも、昨日、道野から「お前ら本当につき合っていないのか？」

といつになく真剣な表情で訊かれた。当然、強く否定したが一部ではすでに噂になっていっているというこらしい。

三年五組の竹内継太と早坂悠希はつき合っている。

学校というところは、噂の真偽などまったく関係なく広まってしまつものだ。それが、恋愛話となれば尚更だ。

「冗談じゃない」継太が大きくため息を吐くと、道野は悪戯っぽく笑いながら、

「早坂ファンは俺を含めて結構いるから、夜道には気をつけろよ」と人の不幸を楽しむように言った。

この現状を悠希は知っているのだろうか。変な噂が広まった原因は悠希にある。今日はそれを問い質してやろうと、昼休みを告げる鐘と同時に、悠希の席へと向かった。

「悠希、ちよつと話があるんだけど」

「あ、ちようどよかった。こつちも話があるところだったんだよね」
「なんだ、やっぱり悠希も噂の件を知っていたのか。それなら話が早い、と思って口を開きかけたとき、

「ついてきて」

悠希は勢いよく立ち上がると、教室のドアを開けて、廊下をスタスタと歩き始めた。

「おい、どこ行くんだよ」

「いいから、早く」

継太は仕方なく悠希の背中を追った。教室では話しにくい内容だけに、場所を変えるのは当然か、と思つたからだ。

悠希の足が止まったのは、学校の敷地内でも一番北に建つ特別棟の裏だった。ここは音楽室や美術室、理科実験室などがあって、授業中以外はめつたにこない場所である。それも一日中日陰に覆われている裏側となれば生徒などいようはずもない。のだが、女子生徒が一人所在なげにぽつんと立っていた。

「あ、相良さん」

水泳部のマネージャーで、三年生の相良千夏だった。継太とは一

年生のとき同じクラスだったこともある。

「千夏ちゃん、お待たせー！」

悠希は、やけに明るく言うと、継太の背中をどんと力強く押した。突然のことに、バランスを崩して二歩足が前に出る。

「ごめんね、せつかくの昼休みにきてもらって」

いつもは元気よくラップタイムを告げる千夏とは思えないほど、細く遠慮がちな声だった。それに、ずっと顔を俯けたままで、どうも様子がおかしい。

「いや、ただ悠希に連れてこられて……あれ？」

振り向くと、悠希の姿が跡形もなく消えていた。

話したいことがあるのは悠希ではなくて、千夏の方だったのか。だとしても、なぜこんな人気のない場所を選んだのか。継太は首をかしげた。

「今日、竹内くん誕生日だよね？」

継太がうん、と頷くと、千夏は、後ろ手にしていた両手を真っ直ぐ前に伸ばした。手には、きれいな青色で包装された細長い箱があった。

「おいしくないと思うけど、お菓子を焼いてみたの。よかったら食べて」

「あ、ありがとう」

継太が箱を受け取ろうとしたとき、親指が

彼女の手に一瞬触れた。すると、千夏はさっと手を引っ込めて顔を赤くした。

「ごめん」

千夏の過敏な反応に、継太は咄嗟に謝った。しかし、千夏は体を硬直させて、黙ってしまった。

しん、と静まり返った空気が重く、圧迫感まである。

「これ、帰ったら食べるよ。本当にありがとう。俺、教室に戻るよ。相良さんもお昼まだだよね？」

たまらず踵を返そうとした継太に、「待って！」と甲高い声が飛

んだ。

「竹内くん、本当に部活辞めちゃうの？」

継太は苦笑しながら後頭部を掻いた。

「俺自身はもう退部したつもりなんだけど。まだ悠希が阻止しようとしてるの？」

「だって、竹内くんがいないと……」

「あいつ、まだ俺を倒してない、とか言ってるんだろ？ 全国に行けば俺に勝ったことになるって、相良さんから言っちゃってよ。中学のときから勝手にライバル視されて本当に困ってるんだから」

継太の辟易した顔に、千夏はくすくすと笑い始めた。

「竹内くんって、本当に悠希ちゃんのこと好きだよな」

「え？」

継太はおもいつきり顔をしかめた。よくないことに、千夏の耳にも噂が届いてしまっているようだ。

「ち、違うよ。相良さんまで何言ってるの。へ、変な噂は信じちゃだめだよ。あんなのまったくのでたらめだから」

途中、舌を噛みそうになりながらも、必死になって否定の言葉をまくし立てたのが、おかしかったのか、千夏はついに吹きだした。

「そんなにおかしなこと言ってるかな？」

訝しむ継太に千夏は首を左右に振った。

「水泳部に残ってほしいのは、悠希ちゃんだけじゃないよ。わたしも竹内くんのが好きだから」

「は？」

いまなんて言った？ 継太は目をぱちぱちと瞬かせた。

「変なこと言っでごめんね。誕生日おめでとう」

千夏は初めて顔を上げて、にこりと微笑んだ。だが、その目にはうつすらと涙がたまっていることに気づいて、今度は目を丸くした。

「相良さん、大丈夫？」

千夏はさっと顔を伏せて、ごめんなさい、と声を絞り出すように言ったかと思うと、下を向いたまま走り去ってしまった。

「……なんで？」

なぜか千夏を泣かせてしまった。その事実、継太は眉を八の字にして首を捻った。

その日の夜、いつもは帰りの遅い父親が珍しく七時に玄関のドアを開けた。帰ってくるなり「飯にしよう」と言つて、近所にある寿司店のロゴマークが入った袋を得意げにひよいと掲げてみせた。

継太は子供のころから寿司に目がない。なかでも好きなのが、鯛つばきと鯛のえんがわで、それを知っている父親は、他のネタよりも多めに買ってきていた。

「十八歳かあ、子供の成長つてのは本当に早いもんだなあ」

お茶をすすりながら、しみじみと言う父親を横目で見て、父さんこそ歳取つたよなあ、と心の中で呟いた。髪の中には白いものが目立つようになり、口元には一本の縦皺ができていた。継太が二歳のときに妻を亡くしてから、十六年間ずっと男手一つで育ててきたのだから、その苦勞が表に出るのも当然かもしれない。

父親は出版社に務めている。出版業は、早朝から深夜まで非常にハードな仕事だと聞いたことがある。それでも父親は、継太の運動会や保護者会などには、仕事の折り合いをつけて、参加してくれたし、いつも会社からは寄り道せずに帰ってきてくれた。だから、母親がいけないことを不憫だとか不幸だとか思ったことは一度もない。でも、それが父親の出世を犠牲にしたものだったと感じたのは、高校入学を目前にしたある夜の出来事だった。

普段、家でもめつたに酒を飲むことのない父親が、十一時過ぎに泥酔状態でタクシーから運ばれてきたのだ。同僚と思われる男性に肩を担がれた父親は、涙なのかよだれなのか、よくわからない液体で、顔をくしゃくしゃにしていた。二人掛かりで、なんとか上がり框に腰を下ろさせると、突然、父親は男性に向かつて「課長！ 昇進おめれとうございます！ 今日ほどもめでたい日はございませぬ！ 本当におめれとうございませぬ！」と呂律の回らない舌で、何度も同じことを繰り返した。課長と呼ばれた男性はどう見ても父

親より歳下だった。きつと、父親の同期はもつと早くに出世を遂げているに違いない。どんなに悔しい思いをしてきたことだろう。酔い潰れて、玄関で眠ってしまった父親の顔は本当に惨めだった。けれど、その顔こそが、いままで自分を苦勞しながら育ててくれた一面と思うと、感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。翌朝、父親は気まずそうに「昨夜はすまなかった」と言った。継太は、フライ返しで目玉焼きをすくいながら「もう子供じゃないから、思う存分仕事してくれよ。飯くらい自分で作れるからさ」と笑い掛けた。父親は黙って頷くと、そつと目尻を指で押さえた。

それから、父親が休みの日以外の炊事洗濯は、すべて継太が担うようになった。最初は心配していた父親も、数日後には、任せられると思うと、一気に帰りが遅くなった。年末の繁忙期なんかは、帰宅しないことも多く、通常期でも継太が起きる時間よりも早く家を出て、深夜に帰宅することが当たり前になっていった。活き活きとして仕事に励む父親の姿は、最高に恰好良かった。

「進学を考えてるのか？」

寿司をほぼ平らげ、満腹感を味わっていたところへの唐突な質問だった。

「うーん」継太は首をかしげた。「一応、大学の資料とか見てるんだけど、本当に大学まで行って勉強したいことかどうかわからないんだよね」

桜橋高校では毎年八割以上の生徒が大学への進学を希望している。当然、三年生ともなれば受験を前提にした授業になり、進路相談も頻繁に行われる。だが、その空気に、継太は違和感を覚えずにはいられなかった。自分は、大学で法律の勉強がしたいのか？ 経済を学びたいのか？ 答えはノーのように思えた。

「ママも同じこと言ってたよ。机の上で勉強するよりも早く現場で仕事したかったから警官になった、てね」

ママというのはもちろん死んだ母親のことだ。四十六にもなって、その呼び方はいい加減止めて欲しかったが、二十六歳、結婚三年目

にしてこの世を去った母親は、いつまでも若いママのままに違いない。

「さてと、風呂でも洗うかあ」

おもむろに椅子から立ち上がるうとする父親に、

「俺が洗うから、座ってなよ」

と制したが、首を横に振って、

「いいんだよ。そんなに年寄り扱いしないでくれ」

と苦笑しながらリビングを出て行ったが、ドタドタと足音を立てて、すぐに戻ってきた。

「やっぱり歳かな？ さっきの続きだけど、大事なこと言うの忘れてた」

「なに？」

「ママはいつも言ってたよ。もっと勉強して、やっぱり大学に行けばよかった、て。家計のことは心配しなくていいぞ。そりゃあ、国立の方がありがたいけど、私立の一つや二つどうってことない」

進学を希望するかどうかは別として父親の言葉はうれしかった。

だが、借金なしで、私立大に通わせる余裕などないことくらい知っている。中途半端な気持ちのまま周りの空気に流されて、大学受験に臨むことが一番良くないことだと継太は思った。

風呂から上がった父親にコーヒーを淹れてる間に、相良千夏からもらったお菓子の箱を開けた。中身はパウンドケーキだった。レーズンにほどよくラム酒が利いていて、アルコールが鼻を抜ける感覚は、大人の味だった。

「コーヒーに合うなあ。継太、誰に作ってもらったんだ？ 彼女か？」

「水泳部のマネージャーだよ。こんな特技があつたなんて、全然知らなかつたなあ」

「鈍いなあ。継太のために何を作るか何日も頭を悩ませて、それから作り方を勉強して作つたに決まつてるだろう。これ一個作るために、何十個も失敗してるかもしれないぞ」

力説してくる父親に、継太は「まさか」と一笑した。すると父親は腕を組んで、

「そんな考えだと、彼女できないぞ」

と真剣な表情と低いトーンで言った。父親と恋愛について話すなんて、あまりに恥ずかしすぎる。

「彼女なんていらぬんだよ」

話を打ち切るために、乱暴に言い放つた。すると、父親はテープルを叩きながら、げらげらと大笑いを始めた。

バカにされているみたいで歯痒く思っているところに、電話が鳴った。

「はいはいはいはい」

涙を拭いながら腰を上げた父親が、テレビの横に置いてある受話器を取って、もしもしと会話を始めた。

てつきり会社の人からかと思っていたら、父親に受話器を指で差されて、

「早坂さんからだぞ」

と言われた。時刻はちょうど九時。一体何の用だろう。

「早坂さんて、ケーキ焼いてくれたコか？」

興味津々と書かれた顔で訊かれ、継太は面倒に思いながらも、

「早坂は、女子水泳部の部長」

素っ気なく答えて受話器を受け取った。父親は、ほうと口をすぼめて、

「やっぱりママに似て、継太はもてるんだなあ」

と一人で感心するように呟いた。

「父さんが期待しているようなことはないから。ただのクラスメイ
トだよ」

「それならいいけど。二股とかやめておけよ。女の口を傷つけたら
絶対にダメだぞ」

「はいはい」

適当に頷きながら、継太は受話器を持って二階にある自分の部屋
へ向かった。

部屋の電気を点けると同時に保留を解除して、耳に当てた。

「もしもし、継太？」

たった一言でわかった。声に棘がある。なぜか悠希はご立腹のよ
うだ。

「そうだけど、なに？」と言いながら、受話器を耳から少し遠ざけ
る。

「あんた千夏ちゃんに何言ったのよ！」

容赦ない怒声が受話器越しから放たれた。まともな耳を当ててい
たら、聴覚が破壊され、卒倒していただろう。

継太は一つ息を吸った。

「いきなりでかい声出すな。俺の鼓膜を破りたいのかよ！」

いつものように、こちらも負けじと大声で応酬する。

「千夏ちゃんを泣かせておいて、鼓膜の一つくらいどうだっていう
のよ」

手の力が緩んで、危うく受話器を落としそうになった。やっぱり

泣かせたのは、俺なのか。手の甲を額に当てて、昼休みのことをよく思い出してみた。泣かせるようなことをした憶えは一切ない。

「もしもし？ ももしし！」

継太から反応が返ってこないことに悠希は苛ついているようで、何度も呼び掛けてきた。継太は嘆息して、受話器を耳に当て直して問い掛けた。

「相良さん、なんて言ってた？」

真剣さが伝わったのか、一瞬間があつて悠希は声のトーンを下げた答えた。

「なんにも言わない。でも、部活中もずっと目が腫れてた」

「なんでそれが俺のせいになるんだよ？」

「だって、今日告白されたでしょ？」

悠希は、もどかしそうに言った直後に「あ」と声を漏らした。受話器越しからでも、しまった、という表情が窺える。

「ケーキもらっただけだよ。それだけで告白に」

わたしも竹内くんのが好き。

千夏の声が突如脳裏で甦り、継太は言葉を詰まらせた。そうだ、確かに好きと言われた。それでも、あの場で聞き流してしまったのは、「わたしも」と相良千夏が言ったからだ。「も」って何だ？

「ほらあ、やっぱり告白されてる！」

「ちょっと待て！ 仮にそうだとしても、俺は、イエスともノーとも言っていない」

「じゃあ、何で千夏ちゃんは泣いてたのよ？ 今の話だと、告白されたことにさえ気づいてないじゃない」

うっと継太は低く呻いた。千夏のこととは、丸顔で明るくかわいらしいコだとは思う。丁寧に記録されたラップタイムは、練習を組み立てるのにお世話になった。千夏にはいつも感謝していた。でも、異性として好きだと思つたことは一度もない。

「あんなにいいコを傷つけるなんて、サイテーね」

「じゃあ、どうすれば良かったんだよ？」

「そんなことあたしに訊かないでよ」

継太はため息を吐いた。もし、あのとき千夏からの告白に気づいて、それを断っていたらどうなったのだろうか。それでも、彼女を傷つけることに変わりはないはずだ。

「ただ一つ言えることは……」

くぐもった悠希の声が聞こえてきて、継太は受話器に意識を集中させた。

「勇気を振り絞って告白したんだから、たとえダメでもきちんと答えは出してほしい、とあたしなら思う。気づかないなんてひどすぎるよ」

「そうか、そうだよなあ……」

大きなため息を吐いて天井を見上げた。部屋を照らす蛍光灯がやけに眩しくて、目を細めた。自分は、恋愛が大の苦手であることを実感した。

「そういうことだから、明日はもちろん部活に来るよね?」

明日は四月二十九日、祝日で学校は休みだ。だが、この日は毎年、水泳部恒例の行事が行われている。

「部員でもないのに、プール掃除をしろって言うのか?」

「当たり前でしょ。残念ですが、継太の退部はまだ受理されていません」

語尾の伸ばし方が苛つかせる。受話器の向こうでは、意地悪く舌でも出しているのだろう。

来月一日からのプール開きを前に、水泳部にとってプール掃除は避けては通れない最も大事で、過酷な行事だった。一年間溜まりに溜まった汚れはすさまじく、大量のコケやヘドロが壁面や底に付着している。奇妙な生物も数多く蠢いていて、虫嫌いには地獄だ。そんな地獄絵図を部内では「サラシコ」と呼ばれる薬品をまきながら、ひたすらデッキブラシで磨いていくのだが、この正式名称を誰も知らない薬品がまた厄介な代物なのだ。非常に酸性が強く危険な薬品のため、目にはゴーグル、口にはマスク、ゴム手袋と長靴を着用した完全防備の状態で掃除に臨むのだが、それでも一時間もしない内に、トイレ用洗剤の何十倍も強烈な刺激臭が、鼻や喉を襲うのだ。その痛みは、丸一日以上残り続け、唾を飲み込むたびに、刺すような痛みを我慢しなければならぬ。

「プール掃除から逃げようたってそうはいかないんだから。千夏ちゃんには、継太が明日来ることはもう伝えてあるから、絶対に来なさいよ」

「何だよそれ、汚ねーな」

「はいはい、どうせあたしはプールより汚い女ですよ。それじゃ、明日九時集合だから、よろしくー」

陽気な声とともに、電話は切られた。

継太は電話を机の上に置くと、ベッドへ身を投げた。スプリングが悲鳴に似た音を立てて、体が上下に揺れた。

プール掃除はもちろんイヤだ。でも、内心ではほっとしている部分もあった。退部届けを出しているとはいえ、掃除の大変さは充分に知っているから、参加しないことに後ろめたさを感じていた。

部員たち、とくに後輩たちと顔を合わせるのは久しぶりだった。それに、今年の新入部員も気になるところだった。ずっと気になっていたが、あえて悠希には訊かないようにしていた。五人以上入部していれば御の字だが、実際はどうなのだろう。部室の汚さや道具不足に、がっかりしてはいないだろうか。

継太は、愛用している目覚まし時計を八時にセットして、一ヶ月前まで部長を務めていた水泳部のことをあれやこれやと考えた。

翌朝、部室に向かっている途中、継太に最初に気づいたのは、同学年の樋川だった。

「おお、タケ！ 来てくれたのか！」

樋川は水泳部よりも柔道部やラグビー部に似つかわしい巨軀を揺らして継太に駆け寄った。

一ヶ月ぶりにタケと呼ばれて、継太はどこかくすぐったい気がした。タケとあだ名で呼ばれるのは部内だけだからだ。

「やった、タケさんが来てくれたぞ！」

「俺はタケさんなら来てくれると信じてたよ」

後輩たちが、目を輝かせ、次々と継太の手を握った。少人数の水泳部では、プール掃除の人員が一人増加するだけでずいぶん心強く感じるものだ。しかも、それが経験者となれば尚更だ。ただ、それにしても部員たちの喜びようは大げさすぎると思つて、継太は苦笑した。

部室の中は相変わらずカビ臭くて、壁沿いに置かれた古い木製の棚には、年代物のビート板やブルが雑然と並べられていた。

唯一変わっていたのは、部室の隅で小さく固まっている新入部員

の存在だった。

継太は、隣に立つ樋川の脇を肘で小突いて、新入部員たちの方を顎でしゃくった。樋川は、「ああ」と短く声を漏らして、継太の肩にポンと手を置いた。

「おい、一年。頼もしい助っ人が来てくれたぞおー。ほら、こっちに来い」

手をひらひら振って三人の一年生を呼んだ。

三人は、継太と樋川の前までおすおすと歩を進めた。三人とも経験者らしく肩幅が広く、骨盤が出ている。体格だけなら今年の一年生は結構期待できそうだ。

「一年喜べ。こちらが、我が桜橋高校水泳部部長の竹内継太さんだ」
誇らしげに言い放った樋川の顔を継太は慌てて振り向き見た。

「おい、何を言ってる」
肩に置かれていた手にぐっと力がこめられて、継太は言葉を詰まらせた。

「だってそうだろう？ タケの退部は認められてないんだから」
にやりと笑う樋川に継太は顔をしかめた。一ヶ月近くも部にまったく顔を出していない部長などいるものか。それを良しとしている樋川はなにを考えているだ。

「部長が幽霊部員でどうするんだよ。本気で言ってるのか？」

「そんなに怖い顔するなよ。とりあえず一年を紹介するから」

そう言って、継太の体をくるりと反転させて、一年生の方へ向けさせた。

「左から田中君、佐藤君、山田君。三人とも中学でも水泳部だったんだよな？」

「あ、はい！」

三人は声をそろえて返事をして「田中です」「佐藤です」「山田です」と直角に頭を下げた。

「そんなに緊張しなくていいよ。部長って言うのは嘘だからさ。俺の名前なんて覚える必要もないから」

明らかに恐縮している一年生に、継太はできるだけ優しく微笑んだ。水泳部は他の体育系の部とは違って、先輩後輩の上下関係はほとんどない。そこを継太は気に入っていた。

「ほらほら油売ってないで、さっさと着替えてよ」

学校指定の藍色のジャージに身を包んだ悠希が、手にしたデッキブラシの頭をコンコン地面に叩きながら後ろから近づいてきた。

「女子はもうみんな準備できてるんだから、早く上がってきてよ」

プールは、部室の脇にある外階段を上がった二階部分にある。部員は部室で着替えを済ませたら、直ちに二階のプールサイドに集合することが慣例化されているのだ。

「早坂、タケが来てくれたぞ」

声を弾ませる樋川とは対照的に、悠希は冷たい表情で、

「当然でしょ」

とだけ言つて、階段を上っていた。

樋川は下唇を突き出して、首をかしげた。

「なんだ？ 早坂が一番喜ぶと思つていたのに。生理か？」

「朝からつままないこと言つてんじゃねえよ」

継太は部室の中に入ると、背中に背負つていたバッグからジャージと長靴を取り出した。それから、ゴーグルとマスクとゴム手袋を手に取る。準備に抜かりはない。

着替えを終えてから樋川と一緒に二階へ上がった。すでに女子水泳部も含めた部員たちがプールサイドに集合していたのだが、継太はどこかしら違和感を覚えた。

なんだろう、と少し考えたところで、その正体に気づいた。女子の人数がやけに多いのだ。

「おい、樋川。一年の女子は何人入った？」

継太の質問に樋川はうれしそうに口角を上げた。

「六人だ。すげえだろ？ 近年まれに見る大漁だ。今世紀最大の奇跡だよ」

信じられない数字だった。一学年二人いれば御の字といわれてき

た女子水泳部に、一気に六人も入部したなんて、奇跡と断言する樋川の気持ちもよくわかる。

「早坂の力だよ。タケも同じクラスになってわかっただろ？ あいつ、女子にはすげえ人気あるからさ。一年生の目にも早坂は魅力的に映ったんだろうな」

樋川は一、二年生のとき悠希と同じクラスだったから彼女の交友関係には詳しいらしく、今年のバレンタインデーで、どんなイケメン男子よりも、悠希が一番チョコをもらっていた、と部内でこそこそ言いふらしていたのを思い出した。

まあ、理由はなんにせよ、部員が増えることは喜ばしいことだ。もしかしたら、部費の問題も解決できるかもしれない。プールサイドに上がりながら自然と頬が緩んだ。

「竹内くん！」

突然、甲高い声が上がった。見ると、口元を両手で覆った相良千夏が目丸くして、第六コースの前で棒立ちになっていた。

明らかに継太がここに来ることを知らなかった反応だ。

継太はじろりと悠希の顔を睨んだが、彼女はとぼけたように視線を逸らした。

だまされた、と今更気づいたところで部員たちに背中を向けて帰るわけにもいかない。二年間世話になったプールだ。とことんきれいにしてやるうじゃないか。

「はい、全員整列。田中、きちんと列をそろえて」

スタート台に立った悠希が張りのある声で指示を出し始めた。注意された一年生の田中は「すみません」と慌てて姿勢を正した。悠希には、部長としての風格と威厳が備わっていて、すでに一年生にも浸透しているようだ。樋川から部長と紹介されたときに、萎縮していた理由はこれだったのか、と継太は思った。

「見ての通り、かなり汚れてるよね。下はコケですごく滑るから気をつけて。もしサラシコが顔など直接皮膚に付いたときはすぐに洗い流すように。放っておくと火傷したみたいになっちゃうからね」

悠希が話す注意一つ一つに部員たちは、うんうんと頷いた。プール掃除は、一つ間違えれば大怪我にもつながりかねない大変危険な作業でもあるのだ。

「それじゃあ、早速始めます。男子はコース側から、女子は七コース側から順番に下りて」

左右のコース脇に設置されたハシゴを使って、数時間前までは水の中だったプール底へと一人一人慎重に底へと下りていく。底は、水分を含んだ黒いどろどろしたヘドロのような固形物があちこちに点在していて、足を踏み入れた瞬間、ぐにやりとした気持ち悪い感触が長靴からでも伝わってくる。しかも、歩けば、ぬるぬるして滑りやすく、一步一步に常に注意が必要だ。

およそ十六メートル幅のプールに、ブラシを持った部員全員が均等に横一列で並んだ。そして、いよいよお待ちかねのサラシコの登場だ。サラシコがたつぷり詰まった一斗缶の蓋を開け、スコップを使って前方に撒いていく。最初は白い粒だが、水に触れると煙を出しながら溶け、強烈な刺激臭をすぐに放ち始める。コケとヘドロの生臭さから鼻の奥を突く危険な臭いへの変化に嗅覚が混乱を始めている。

「最初の五メートル始め！」

悠希の笛の合図とともに、一列に並んだ部員たちが一齐にブラシをこすり始める。三十分後に次の合図があるまで前方に引かれた五メートルラインまでひたすら磨くのだ。力を込めて念入りに磨けば磨くほどコケやヘドロは死滅して、夏の間も発生しなくなるから少しも手を抜くわけにはいかない。普段の教室掃除みたいに楽しくおしゃべりしながら、なんて余裕はまったくないのだ。

掃除開始から一時間後、まだ十メートル進んだだけで半分も終わっていないにもかかわらず、すでに両腕には乳酸がたまり、ブラシに伝わる力も弱くなっている。それにサラシコによる刺激臭で喉にも痛みが走り始めた。

更に三十分後、一度小休憩をとるため全員プールサイドに上がる

のだが、みんな辛そうに顔を歪めている。とくに初体験の一年生たちは想像以上の過酷さからか顔色が悪い。

「十五分後に再開するからね。喉が痛い人はのど飴を用意しているから今のうちになめておいて。わかった？」

開始時と変わらず力のこもった声で指示を出す悠希とは対照的に、部員たちは「はい」と力ない気の抜けた返事をした。

継太は他の部員たちと同じように一度部室に戻って、水筒の麦茶をコップ一杯分飲んだ。少し痛みはあるがまだたいしたことはない。まだぐったりとしている後輩たちを尻目に、よし、と気合いを入れ直して二階へ上がると悠希が一人スタート台に腰掛けていた。

「よくもだましてくれたな」

意地悪く言って、悠希の隣、四コースのスタート台に継太はどかりと腰を下ろした。

「本当に来るかどうかわからない不確かなことを千夏ちゃんに言うわけないでしょ」

木で鼻をくくったかのような物言いに、継太もふんと鼻を鳴らした。

「はいはい、どうせ俺は裏切り者ですよ」

「やっと自分のことがわかったのね。少しは成長したんじゃない？ 立派立派」

人を茶化すようにパチパチと手を叩く悠希の態度に、継太のこめかみが熱くなった。

「お前、最近俺にケンカ売りすぎだぞ。そんなに買ってほしいの？ なに無気になってるのよ。部長の継太がプール掃除に参加するのは当然のことでしょ」

「部長？ 俺は退部届けを出したんだぞ」

「へえー。そんなにここを辞めたいの？ それなら二度と来ないでくれる」

「お前が来いって言ったんだろー！」

継太は声を荒げて立ち上がり、悠希の顔を睨みつけた。「なによ」と悠希も応戦するかのよう立ち上がって睨み合いが始まった。

「おいおい、部長同士がケンカするのはやめろよー」

一触即発の空気とは対照的に、語尾を伸ばした間の抜けた声で、

樋川がのっそりとプールサイドに上がってきた。

「タケがいなくなつてから早坂は一人で水泳部をまとめてるんだから、その苦勞をわかつてやってくれよ」

継太は呆れてため息を吐く。

「それは樋川、お前が部長になつて、悠希と一緒にまとめればいいだけの話じゃないか」

「それが、違うんだよな」樋川はゆつくりとかぶりを振つた。

「俺が部長になつたら、それこそタケは本当に退部しちまうだろ」

樋川は、年寄りみたいに、よいしょと言いながら三コースのスタート台にゆつくり座つた。

「俺はイヤなんだよ、卒業アルバムの水泳部の中にタケがいないのが。一年のころからエースだったお前がいなくておかしくないか？」

「そんなことかよ」

「大切なことだよ。なあ、早坂」

突然話を振られた悠希は「え」と一瞬驚いた顔を見せた。

「し、知らないわよ、そんなこと。だいたい、あたしは部長一人で大変だなんて思つてないからね」

突き放すように言つて、ぷいと顔を横に背けた悠希を見て、継太は肩を竦めた。

「だつてさ。樋川、お前の考えすぎみたいだぜ」

「タケもいいかげん携帯持てよ」

「は？」突然出てきた『携帯』の単語に、継太は顔をしかめた。

「メールって便利なもんがあるんだよ。面と向かつてじゃ絶対に言えないようなことも、メールだとあら不思議、素直に伝えられちゃうわけ。タケは一人で責任感じちゃうタイプだろ。絶対携帯持った方がいいと思うんだよ」

「その携帯代は誰が払うんだよ。これから治療費だつて掛かるのに。それに、メールじゃないと相談に乗つてくれない友達ってなんだよ。それは友達って言えるのか？」

「まったく意固地だねえ」

困ったものだ、と言わんばかりに樋川は鼻から勢いよく息を噴き出した。腕を組んで、右に左にへと頭を傾けた後、パンツと膝を叩いた。

「じゃあ、こうしよう。都春としゅんで水泳部の誰かが優勝したらタケは部に戻ってくる。できなかつた場合は、俺が部長をやる」

樋川が言う都春とは、六月中旬に行われる東京都全体の高校を対象にした大規模な大会で、夏のインターハイ出場を占う前哨戦としても重要視されている。都春で優勝できる実力があれば、インターハイ出場は間違いないと言われるほどレベルは高い。

その都春と自分の退部問題がどう関連しているのか、さっぱり理解できず、継太は眉根を寄せた。

「なによ、それ」

継太が疑問を口にするよりも一瞬早く悠希が口を開いた。

「都春で優勝目指すなんて、部員として当たり前でしょ。なにわけのわからないこと言ってるのよ」

「まあまあ、最後まで聞けって」

樋川は不機嫌そうな悠希をなだめるように胸の前で両手のひらを開いてみせた。

「タケには、優勝した部員の専属マネージャーになつてもらおうわけ。練習中のタイムの計測や記録はもちろん、道具の準備・後片付け、昼飯のパシリ。とにかくインターハイ出場までなんでもサポートするわけだ」

それを聞いて、悠希の顔がぱつと明るくなった。

「へえ、おもしろそうね。部室とシャワー室の掃除だって毎日させてもいいよね」

「もちろん」樋川が深く頷く。「清潔な環境で練習したいとお望みであれば、掃除も立派な専属マネージャーの業務ですから」

「うん。それなら納得できる。あたしはオーケーよ」

あたしは、と言った悠希の言葉がすべてを物語っている。都春で

優勝できる可能性があるとしたら悠希以外考えられない。

「タケも文句ないだろ。この条件なら相良の仕事を奪ってしまう心配もないし、なんて言ったって、我が水泳部にとって、インハイ出場者を生み出すのは創部以来の念願なんだから」

継太は顎に手を当てて唸った。

「専属だろうがなんだろうが、マネージャーが認められているのは一人だけだぞ」

「大丈夫、大丈夫。継太はあくまで部長って登録なんだから、学校にはバレやしないさ」

樋川が言うように、マネージャーではなく、これまでのように部長として登録していれば、問題になることはないだろう。だが、継太は、返答に迷って、頭頂部をぼりぼりと掻いた。

もう一押しとばかりに、樋川は声に力を込める。

「もちろん都春優勝者ゼロのときは、俺と早坂がタケのパシリになる。ジュースでもカレーパンでも毎日学食に買いに行ってるさ」
そう言って、樋川は悠希に了承を得るように、彼女の顔をちらりと見た。悠希は了解とばかりにゆっくりまばたきをして応えた。

「俺はそんなこと求めてない。どうすることが水泳部にとって一番良いかが問題なんだ」

「それを言うんなら、俺はたとえタケが泳げなくても部長をやるのがいいと思ってる。でも、タケはそれを良しとしない。それなら、もう賭けをして決めるしかないだろ」

「ま、まあな……」

堂々巡りの話の展開に、悠希は業を煮やしたのか、ぐっと胸を張って継太の前に一歩近づいた。

「もう休憩時間が終わっちゃうじゃない。あたしは、さっきからオーダーだって言ってるんだから早く決めてよ」

自信ありげに、目の前でつんと顎を上げる悠希だが、他校の同学年には、一年生のときから悠希の優勝を阻んでいるライバルが一人いる。九月下旬から練習ができなくなる都立高の桜橋つちとは違って、

名門の私立高に在籍する相手は、室内プールで年中泳げるといふ恵まれた環境にいるのだ。五月から急ごしらえて準備した体で迎えることになる都春で勝つのはとくに難しい。

もし賭け率があれば、悠希のほうが圧倒的に低いはずだ。それなのに、大会に出る悠希は自信満々で、その結果をただ待っているだけの自分が返事に迷っているのはさすがに情けなくて、恥ずかしく思えてきた。

「わかったよ、その賭けに乗る」

「おし、決まりだ。口約束だけだと不安だよな。あとで誓約書を作るからサインしてくれ」

樋川は嬉々とした表情で立ち上がると、奇妙なリズムに乗って体を左右に揺らし始めた。彼は機嫌が良いとき、どこで学んだのか妙なダンスを始める癖があった。

「あ、樋川さんがまた変なダンスしてる」

話がまとまったところで、後輩たちがぞろぞろと上がってきた。計ったようなタイミングの良さに継太は、まさかと樋川を一瞥した。樋川はその視線に気づいて、にやりと白い歯を見せた。

「お前ら、変な、は余計だろう。おーし、みんなブラシを持って。俺みたいに笑顔でやらないと最後までもたないぞー」

「はいはい。わかりましたよー」

悠希のときとは違って、樋川の指示には、後輩たちは、気だるそうな声でばらばらに返事をしてからブラシを手を取った。

この姿こそが水泳部らしいのだが、悠希とのあまりのギャップに継太は思わず吹き出した。

「そつだ、忘れてた」

まだ笑っている継太の横で、樋川がブラシをくるりと一回転させて言った。

「専属マネージャーは、いつでも連絡とれるために、携帯は必須だからな」

継太の顔から笑みが消えた。

「おい、後から付け加えるなよ」

「じゃあ、やっぱりなかったことにするか？ それならちゃんと早坂に理由を説明してくれよ」

継太はうつと言葉を詰まらせた。五分前の約束を反故にしてくれだなんて悠希に言ったら、どれだけ罵られることか。あまりに非現実的すぎる。

「わかったよ。そんなときは携帯買っよ」

しぶしぶ継太は了解したが、なんだか、詐欺師にうまく騙されたみたいな感覚が残った。

開始から二時間半経って二十五メートルあるプールの底面を磨き終えた。黒いヘドロはきれいになくなったが、辺り一面サラシコの刺激臭に包まれ、一秒でも早くこの場を離れたかった。

「これから昼休憩にします」

待っていましたとばかりに一斉に階段を下りていく。こんなに空気がうまかったのか、とプールから離れれば離れるほど全部員が感じたはずだ。

昼食用に、水泳部の顧問が担任を務める一年一組の教室があてがわれていた。

この顧問、少なくとも五年以上は水泳部の顧問を続けているらしいのだが、練習に顔を出すことは一切ない。というのは、本人がカナヅチらしいのだ。当然、泳ぎの指導などできるはずもなく、唯一顧問らしい仕事が、大会当日などの大事な日に大量の差し入れをすることだった。

教室のドアを開けると同時に、教卓に置かれた大量のおにぎりの山が目飛び込んできた。毎年決まって、プール掃除の日には、顧問が昼食を用意してくれるのだが、その量が半端ではない。五十個以上はあるだろうおにぎりの横には、巨大な銀皿の上に大量の唐揚げがてんこ盛りで置かれ、さらには寸胴一杯の豚汁まで用意されていた。

「はあー、今年も頑張ってくれちゃったなあ」

樋川がため息混じりにおにぎりの山に近づく。

「ほら一年、突っ立ってないでどんどん食ってくれよ」

一年生たちに次々とおにぎりを渡していくが、みな魂を抜かれてしまったかのように啞然としている。

驚くのも無理はない。この量を目の当たりにすれば、誰もが相撲部屋にでも入門してしまったか、と錯覚してしまうことだろう。

「これ全部食うんだぞ。少しでも残すとあとでなに言われるかわからないからな」

えっー、と悲鳴にも似た声上がる。継太が一年生のときもいまの一年生たちとまったく同じ反応をしたことをよく覚えている。

料理自慢の顧問にとつて、自分が作った料理を残されるのが一番我慢できないらしく、それを知らなかった過去の先輩たちは一年以上もともに口を聞いてもらえず、種目のエントリー時など様々な場面で支障が起こったそうだ。

「これだけは用意してきたんだけど、それでもきつそうだよね」

マネージャーの相良千夏が鞆から大小様々のタッパーを取り出した。さすがに準備がいい。だが、この顧問が用意した昼食は去年よりも多い。まさか、完食されたと勘違いして、足りなかったとしても思ったのではないだろうか。すべてのタッパーに詰め込んだとしても、かなりの量を胃袋に収める必要があることがありそうだ。

「お腹いっぱいになってもおかわりしてよ」

悠希が手際よく紙製のお椀に豚汁をよそって机の上に並べていった。

満腹になった後は、プール壁面の掃除が待っている。

ぱんぱんに膨れあがった腹を抱えての掃除はさらに困難を極めた。壁面を磨くには激しく腕を上下運動させなければならなかったため、かなりの体力を使う。そのうえ、午後になって気温が上がってくると、午前中に磨き込んだサラシコの刺激臭が足元からもややもやもやと沸き上がり、鼻腔をひん曲げさせた。再開から三十分も経たないうちに、一年生の女子の一人がリタイアした。そして、もう三十分後にはまた一人。こうなると連鎖反応は止まらない。次から次へと顔を青くして白旗を振り始めた。

悠希の肩を借りて、プールから去っていく一年生を横目で見ながら、果たして、終了まで新入部員のうち何人が生き残っているだろうか、などと考えていると、突然、立ちくらみに襲われてブラシに

しがみついた。他人の心配をしている余裕などまったくなくないことに気づいて、継太は歯を食いしばった。壁にこびりいた憎き緑の斑点に向かって、ブラシをこすりつけた。

午後三時、過酷を極めたプール掃除はついに終了のときを迎えた。悠希が顧問に結果報告を終えてから解散の運びとなった。

鼻の奥につんと詰まった感覚が抜けず、喉は唾を飲み込むたびに鋭い痛みが走る。それにブラシの擦りすぎで腕も重い。最後のほうはムキになって、肩にもかなり負担を掛けてしまった。一刻も早く帰宅して、休みたいところだが、継太には、やり残していることがまだ一つあった。

千夏にケーキのお礼を伝えようと朝からずっと機会をうかがっていたのだが、いざ二人だけになるとすると難しかった。女子は何をするにしても常に誰かと一緒に行動している生き物なのだ。

ここは癪だが、悠希の力を借りるほか手段がなさそうだ。

「昨日のことで相良さんと話がしたい」

悠希の隣で独り言を言うかのごとく呟いてみせた。すると、彼女にはやりと一瞬微笑んでから千夏のほうへ駆け寄ると、

「千夏ちゃん、トイレ行こう」

わざとらしく継太に聞こえるように言って、千夏の腕を半ば強引にとつて校舎の中に入って行った。

もちろん、これが「トイレの前で待て」という指示であることを継太は理解した。

まったく尿意はないが、男子トイレに入って、小便器の前に立ち、洗面所で手を洗って出たが、二人はまだのようだった。

トイレの前で、しかも女子を待つために突っ立っていると思うとどうもそわそわして落ち着かなくて、円を描くように辺りを歩き回った。昨日の昼休み、自分がやってくるまで千夏もこんな気分だったのだろうか、と継太は思った。

そうだ、何もトイレの前で待つ必要はないことに継太は気づいた。外に出るためには、必ず自分の下駄箱を通るはずである。確か、千

夏は一組だったはずだ。クラスごとに並んだ下駄箱がパーティション替わりになって、千夏と二人だけの空間を作ることができるはずだ。

継太はいそいそと一組の下足場へ移動して、とにかく待った。トイレの前で待つよりもずっとましだが、遅すぎる。いつも休み時間に女子トイレが混んでいるのもこれなら頷ける。

おそらく三分以上は待っただろう。ようやく、トイレの方から悠希と千夏の声が聞こえてきた。予想どおり下足場に千夏は一人で現れた。

「お、お疲れー」

さりげなく声を掛けるつもりだったが、おもいつきりどもってしまい、それをごまかすように咳き込んでみせた。サラシコで喉が痛いせいもあるが、一番の原因は緊張だ。部員たちといるときは、普通に会話できるのに、二人だけとなると、なぜこつとも勝手に体が緊張してしまうのだろうか。

継太が目の前に現れたことに千夏は一瞬驚いた表情を見せたが、すぐににこりと微笑んで頭を下げた。

「竹内くん、今日は来てくれて本当にありがとう」

「そんな、お礼を言われることじゃないよ。二年間世話になったプールだから掃除ぐらいしないとバチが当たるよね？」

継太の冗談に、千夏は口元を手で覆ってくすくす笑った。悠希に脅されたから来たなんて言えない。

「昨日のケーキありがとう。すごくおいしかったよ。とくに親父が気に入っちゃって、俺よりも多く食べちゃったんだ」

千夏はうれしそうに目を大きく開けて、声を弾ませた。
「ほんとー？ うれしいなあ。男のこつて甘いのが苦手な人も多いでしょ。何にしようかすごく迷ったの。よかったー」

胸に手を当てて、文字通り胸を撫で下ろすように安堵の息を吐いた千夏を見て、継太は思わず吹き出してしまった。

「あーひどい。笑いごとじゃないんだから」

頬を膨らませた千夏に「ごめん、ごめん」と笑いをこらえながら
継太は手を合わせて謝った。

「でも本当に良かった。竹内くん、病院に通い出してからずっと元
気なかつたでしょ。わたしが、なにか力になれることないかなーっ
ていろいろ考えてみたんだけど、なんにもなくて」

そんな風に見られていたとは意外だった。確かに年末、水泳肩が
発覚したときは、精神的にもかなりのショックを受けた。どうして
もっと早く医者に診せなかつたのか、と後悔の念に襲われた。それ
でも、学校では気丈に振る舞っていたつもりだった。小さい頃から
母親がいないことを周りから不憫な目で見られることを一番嫌い、
どんなに母親の存在をうらやましく思ってもおくびにも出さなかつ
た。それなのに、千夏の目には、継太が悄然としているように映っ
ていたらしい。

継太は苦笑いを浮かべて、

「なにも不治の病にかかったわけじゃないんだから大丈夫だよ。安
静にしていれば、手術なしで治るらしいからさ」

継太の言ったことは嘘ではないが、強がりではあった。どんなに
早くても、泳ぎの許可が出るまで三ヶ月。それから徐々に肩を慣ら
していき、思う存分泳げるには一年以上掛かる計算だ。それは、今
年三年生最後の夏を迎える継太にとってはあまりに長すぎる時間だ
った。

「さつき、悠希ちゃんから聞いたよ。都春が終わったら、また部に
戻ってきてくれるって」

「え？ ああ……でも、それは」

継太は返答にためらって首筋を撫でた。継太が部に復帰するのに
大事な条件が抜けている。それを説明すれば、千夏は肩を落とすだ
ろう。

「大丈夫、悠希ちゃんは絶対に優勝するよ」

千夏は迷うことなく断言した。

継太は目を丸くした。都春の優勝が条件だと知ってて、断言でき

る千夏の気持ち理解できない。だが、彼女の目は本気だった。悠希本人といい、どこからその自信が湧いてくるのだろうか。

「だって、わたし以上に竹内くんを必要としているのは悠希ちゃんだもの。負けるわけないよ」

「必要って、悠希がインハイに出場するためには、ってこと？」

「うーん」千夏は考えるように目線を上げて短く唸ると「それもあ
るけど、正解には不十分かな」

「なんだよ、それ」

継太が不満げに顔をしかめると、千夏はその反応を楽しむように
いたずらっぽく微笑んだ。

「わたしから正解は言えないけど、都春の結果が出ればわかるよ、
きつと」

千夏は、自分の下駄箱から靴を取り出すと、中腰になって靴を履
き始めた。

「今すぐ知りたいって言ったら？」

継太の問いに、千夏は大げさなまでに首を左右に振った。

「そ、それは絶対に無理！ ほら、多分玄関で悠希ちゃん待ってる
よ。早く行こっ」

無理矢理、話を打ち切るようにして、千夏は継太の脇をすり抜け
て、玄関の出入口まで駆けて行った。

四月になって、女の口から逃げられるのはこれで何度目だろう。

継太は頭頂部をボリボリと指を立てて掻いた。

(18) (後書き)

これで第一話は終了です。

五月三日。

ゴールデンウィークの初日、継太は、昼間の再放送ドラマを、居間のソファアーに寝転がって見ていた。主人公の男が、浮気相手といちゃついているところを偶然彼女に見られて、「このコは、俺の妹だよ」とみえみえの嘘を吐いているシーンがあまりにくだらなくてテレビを消した。

継太は起き上がって、気合いを入れるように、両腿をパンパンと二度叩いてから「よし」と一つ声に出して自分の部屋へ向かった。机の上には、昨夜一時間で投げ出してしまった大量の宿題が散らかっている。三連休分とはいえ、多すぎだろう。英語なんて一冊まるまるだ。その量を見れば見るほど辟易してしまう。せつかく入れた気合いがため息とともにすべて吐き出されてしまわないうちに、次々とリュックに詰め込む。それから、タンスの一番下の棚から部活で愛用していたジャージを取り出して、上下とも身を包んだ。もう当分着ないと思っただが、使い道を見つけた。香野心優がいたあの図書館までここからおよそ五キロ。往復で十キロだからなまっただ体を慣らすには丁度いい。

継太は玄関のドアを開けた。太陽の光が、目に入って、右目を閉じた。手を翳しながら見上げれば、空は雲一つなく青く澄み渡っている。地方の観光名所は今ごろ大勢の人で賑わっていることだろうが、逆に東京は帰省や旅行で人がぐんと減る。

普段はペットの散歩や、駅へと向かう人たちが賑わう狭い歩道でも、ほとんど人がいないため、ストレスなく走ることができるし、人に迷惑を掛けることはない。継太は意識して、背筋をまっすぐ伸ばし、リズムを刻むように脚を前へ前へと運んだ。

極端なまでに自分の体力が落ちていることに気づいたのは、二日前の体育の授業のことだった。

桜橋高校では、毎年、五月の最初に一五〇〇メートル走の計測を行うことが慣例化されていて、当然一、二年時の記録も残っている。走り終えた直後に渡された記録用紙に、自分のタイムを書き込みながら継太は愕然とした。

一年のときよりも遅くなっている。

継太の額から冷たい汗が流れた。一年生のこの時期は、やっと受験勉強から解放されて、急いで体力作りをしようとしていたところだった。当時はこれ以上遅くなることはないと思っていたのだが……。これも水泳肩のせいか。いや、走っているときに腕を振るくらいで痛みを感じることはなかった。単純に体がなまってしまっているのだ。

その日の夜、風呂場の鏡でよく全身を見ると、小学生のころから十字に割れていた腹筋に若干たるみ生じている気がした。腕を肘から直角に曲げて力コブを作ってみる。触って硬さも確認してみたが、こんなもんだったかなあ、と不安になるだけだった。考えてみると、退部してから食事の量を半分に減らしたのに、六十五キロの体重は変わっていない。

体を鍛えるのは毎日の地道な努力が必要なくせに、落ちるときはあっという間だ。腹の出た脂肪だらけの体になんか死んでもなりたくない。ならば、とにかく走ることに思った。有酸素運動は脂肪を燃焼させるのに効果的はずだし、肩に負担を掛けることもない。走るルートを考えるために、地図を眺めていると、ふと心優に会った図書館が目止まった。やはり、心優のことが気になる。もしかしたら、図書館に行けばまた会えるかもしれない。

家を出て、十分以上走っただろう。環八の交差点が見えてきた。目的の図書館まではあと一キロ程だろう。しかし、継太の脚は鉛のように重くなり、もうずいぶん前から息は上がってしまった。信号待ちの間に立ち止まると、あまりの辛さに腰が曲がり、膝に手を当ててせいぜいと息を切らした。頬から大粒の汗がアスファルトに落ちる。

五キロなんて、水泳部では、水に入る前の準備運動として毎日走っていた距離だ。それがこんなにも苦しく感じるなんて。情けなさすぎて、片方の頬だけでひくひくと自嘲してしまった。

ふらふらになりながら、ようやく図書館に着いた。まずは、汗でびっしょりになったジャージから着替えるためにトイレへ向かう。オレンジ色の照明に照らされたトイレは、清掃が行き届いていて、個室も広い。上着を脱いで持参したタオルで汗を拭いた後、Ｔシャツを着た。下はとりあえず汗を拭くだけでいいだろう。

継太はトイレから出ると、一通り図書館の中を歩いて回った。先月来たときよりも明らかに人が少なく閑散としている。やはりゴールデンウィーク中は東京の住民は遠出してしまおうようだ。

館内を一周して、香野心優の姿がないことがわかると、継太は思わずため息を漏らした。館内が静かなせいもあるが、自分のため息の大きさに、はっとして口元を押さえた。心優が今日ここにいるなんて奇蹟にも近い確率であることはわかっていいる。なにをがっかりしているんだと、継太は気持ちを切りかえて、窓際の適当な席に座ると、リュックから英語のテキストと辞書を取り出した。長文の和訳から取り掛かることを決めていた。ノートにシャーペンを書らせると、しんと静まり返った館内にかりかりと音が響いた。その音が心地良くて、クセになりそうな感覚だった。

(2) (前書き)

諸事情によりこの作品を当分書き続けることができなくなっていました。ここまで読んでいただいた方々には誠に申し訳なく思います。推敲すらしてない状態ですが、とにかく書いている部分をすべて公開いたします。小説を書くこと自体を辞めたわけではありませんので、新作を公開した際はどうぞよろしくお願いいたします。

午後五時、図書館を出た。

夕陽が街中を照らしていた。その中を継太は、早くも筋肉痛を訴え始めた脚の痛み顔に顔を歪めながら、帰りの五キロを走り抜いた。

帰宅してすぐにシャワーを浴びた。それから夕飯の準備に取り掛かる。もう腹ペコで死にそうだ。出掛ける前に炊飯器の予約タイマーを設定していかなかったことを後悔した。フライパンで野菜を炒めている最中に、我慢できなくなつて、ぱくぱくとつまんでいると止まらなくなつてしまった。結局、皿に移すことなく父親の分も含めた二人分の量をフライパンから直接食べきってしまったのだ。

こんなにおいしく感じる食事は久しぶりだ。それに、十キロ走つて、三時間以上勉強して疲れているはずなのに、気分は爽快だった。やっぱり自分は体を動かさないとダメらしい、と継太は思った。この一ヶ月、学校から帰宅しても、勉強に身を入れるわけでもなくただごろごろしていた。そのくせ、体がだるくて食欲が湧くこともなく、仕事から帰ってくる父親のために、という意識だけで夕飯を作っていた。

肩の怪我が、継太から水泳部を奪つただけではなく、生活そのものを負の方向へと導いてしまっていることをようやく自覚した。

継太は明日も図書館に通うことを決めた。いや、連休が明けても、学校から直接走って行こう。運動にもなるし勉強もはかどる。まさに一石二鳥だ。

そう決意して、継太は冷蔵庫の扉を勢いよく開けた。まだまだ腹は満たされていない。

天気に恵まれた三連休が終わった。

三日間とも図書館を往復した。朝十時に家を出て、図書館で黙々と宿題に向かい、午後五時に家に帰った。お陰で、最初はあまりの

量に圧倒されていた宿題もこなすことができた。考えてみれば、高校入学以来、これほどじっくり勉強に時間を割いたのは初めてだった。部活から帰って、夕食の準備をして、朝は弁当を作る。もちろん洗濯や掃除も必要だ。だから、どうしても宿題や、予習復習はおろそかになってしまい、とにかく終わらせることだけが目的になってしまっていた。

結局、心優とは会えなかったが、図書館の効用性は充分に感じられた。中間や期末考査間近になると、学校の図書室が大混雑する理由が理解できた。

放課後の鐘が鳴って、おのおの部活や帰宅のために教室から散っていくなか、継太はジャージへと着替えた。

鞆を肩から斜めに掛け、玄関でシューズに履きかえた。走り出す前に、軽く屈伸運動をして、最後に一つ大きく息を吸ってからゆっくり息を吐いた。

ランニングを始めてたった三日でも、日増しに体力がついていることは間違いない。ここから図書館までは、五キロ弱。これは問題ない。ただ、図書館から自宅までは、十キロ近くありそうだった。僅かだが、筋肉痛の残る脚で果たして完走できるのか。不安ではなく。距離と自分の体力とが勝負するみたいで楽しみだった。

継太は走り出した。体重が右足から左足、左から右へと変わるたびに、背中の鞆が上下に揺れる。そう、昨日までとは違って、六限分の教科書と制服が詰め込まれ、パンパンに膨らんだ鞆を背負っているのだ。当然、体力の消耗もその分早くなる。

考えを改め直そう。行きの五キロさえかなりきつい。

図書館のトイレで再び制服に着替え、適当な席を探す。一階は、小学生以下の子供たちが多くて、お世辞にも静かだとは言えない。継太は二階への階段を上った。

連休中に比べれば、人は多かった。それでも奥の方は空いているようだ。目星をつけた席へ向かう継太の視界の隅に、ふと高く積ま

れた本の山が映った。その高さは一メートル以上。どれも分厚くて、何かの学術書か辞典のようだった。

ずいぶん勉強熱心だな、と感心しながら、こんな難しい本を読むのは一体どんな人だろうと、興味が湧いた。

ここからでは、本の山と向かい側に座っている人の背中に遮られて、ほとんど見えなかった。横を通り過ぎるときに、横目で確認してみようと思った。きっと大学生や難しい資格試験に挑戦する社会人だろう。スポーツに打ち込む姿は格好いいと思っていたが、勉強もまたそうであることに気づいたのは、この図書館に通うようになってからだった。ガリ勉は、格好良い。

継太は、机の真横まで歩を進めたところで、目線だけを横にした。思わず足が止まった。本の山を越えた先には、香野心優がいたからだ。心優は一心不乱に、広げたページをノートに書き写していた。「香野さん」

継太の呼び掛けに、心優は、はっとして、首を継太の方に勢いよく向けた。

「継太さん！」
館内に素っ頓狂な声が響いて、心優は慌てて口元を押さえ、しまったという表情を作った。

継太は人差し指で談話室の方向を示して「移動しようか？」と小声で言った。心優は顔を赤くしてこくりと頷いた。

「ごめん、いきなり声掛けたりして。そりゃ、びっくりするよね」
前回と同様に向かい合って座るなり、継太は軽く頭を下げた。

「いえ、継太さんは悪くないんです。悪いのはわたしなんです。どうしても、継太さんを見ると驚いちゃって……」

一瞬言葉を切った心優は、慌てて顔の前で手のひらを左右に振った。

「ごめんなさい。また、わたし継太さんに失礼なことを言ってますよね。違うんです、わたしが勝手に怖がってるだけで　いえ、とにかく継太さんは悪くないんです。ああ、なんて言ったらいいんだ

るう」

「大丈夫だよ、なんとも思っていないから」

継太は吹きだしてから、混乱状態にある心優をなだめるように言った。

「でも、俺を見て驚くってことは、まだ夢を見てるってこと？」

「……はい」

心優は申し訳なさそうに小声で答えた。

「病院には行った？」

「はい」とまた弱々しい答えが返ってくる。

「検査はどうだったの？」

なんだか取り調べの尋問みたいになってないか、と思いつつも訊かすにはいらなかった。

「何度か病院にも通って、先月の二十八日には、検査入院までして徹底的に調べてもらったんです。それで、昨日結果が出たんですけど」

心優は顔を伏せた。それが何を意味するのかは、継太にもわかった。

「なんの異常もなかったんだね？」

心優が頷くのを確認してから、継太は椅子の背もたれに体を預けた。

「まあ、とりあえず良かったじゃない。おかしい夢は続いているけど病気じゃない。それならもう気にすることないんじゃないかな？」

慰めたつもりが、心優はいっそう表情を暗くした。

「実は、四月の初めに、ここで継太さんに会ってから、声も聞こえなくなつたし、夢も見なくなつたんです」

意外な言葉に「おお」と継太は目を見開いた。

「でも、一週間後には別の夢を見るようになってしまったんです」

「別の？　どんな？」

継太は身を乗り出した。

「それが……その……」

心優の顔が、みるみるうちに真っ赤に染まっっていく。

「どうしたの？」

紅潮した顔からは、汗まで噴き出している。心優は、あたふたとブレザーのポケットからハンカチを取り出して、額の汗を押さえつけるように拭いた。明らかに動揺している。

「すぐく言いにくいことなんですけど」

「君には、もうずいぶん驚かされているから大丈夫」

「はい。今繰り返し見ている夢は、継太さんとデートしてるんです」「はい？」

驚かないと宣言しておきながら、素っ頓狂な声を上げてしまった。

「ごめんなさい。また不快な思いをさせてしまってます」

継太の反応がいけなかったのか、心優は平謝りを続けた。

「ごめん、ごめん。まったく予想してなかったことだったから、つい。それで、デートって、どういうこと？」

デートと言葉に出すと案外恥ずかしいものであることが初めてわかった。顔が熱い。心優が顔を真っ赤にして、もじもじしているのも納得がいった。

「恋人同士みたいに腕を組んで、街中まちなかを歩いてるんです。わたしも継太さんもすごく楽しそうなんです」

そこまで話すのが限界だったのか、心優は完全に下を向いてしまった。

「その夢を繰り返し見てるんだね？」

「はい。ごめんなさい」

心優はとうとう両手で顔を覆ってしまった。

「いや、こっちこそごめんよ。デートの相手が俺なんかで。それを何度も夢で見るなんて気持ち悪いよね」

ははは、と乾いた笑いを浮かべながら継太は後頭部を掻いた。

「そんなことないです」心優はかぶりを左右に振った。「継太さんのこと知ってから、夢はもう怖くないんです。ただ、それに合わせ、また声も聞こえるようになったんです」

「それじゃ、やっぱり夢と幻聴はリンクしてるんだね？」

「間違いないと思います。いままで、声はテストのときにしか聞こえなかったんですけど、最近は、その……」

心優はまた言いにくそうにまた言葉を詰まらせた。

「体育の授業中にも聞こえるんです」

「体育？」

「わたし運動音痴なんです。いま授業で、バレーボールをやってるんですけど、そのときに『もっと腰を落とせ』とか『ボールをしっかり見る』とか本当に厳しいんです」

「幻聴に叱られてるってこと？」

「はい。叱られてます」

心優は弱々しく頷いた。テストの解答を覚えてくれたり、バレーボールの指導をしたり、まるで。

「なんだか、学校の先生みたいだね」

「そうなんです。わたしもそう思ってたんです！」

イメージの共有ができたことがうれしかったのか、心優は声を強くした。

「いま俺に話したことって医者にも全部話したの？」

「話しました。でも、うんうんと頷いてくれるだけで、原因や治療法は全然言ってくれないんです。最後に、また来てって言われて、終わりなんです」

「それで、自分で調べようとしたんだ」

「もしかしたらって思うのがあって、いま要点だけを写してたんです」

心優は手元に開いていたノートを、すっと継太の前に差し出した。

『多重人格障害』

各々は独立した記憶、行動、好みを持った完全な人格である。一方が他方の記憶のなかに入ることにはなく、またほとんど常に互いの人格の存在に気づくこともない。繰り返し本人をさしおいて「表舞台」に現れ、勝手に行動している。そして重要なことは、別の人格

が活躍している間、本人（および他の人格）にはその間の記憶がないことである。

「わたしの頭の中に？先生？みたいな別人格が住んでいることは、もう間違いないと思うんです。？先生？は、わたしよりもずっと頭が良くてスポーツもできる人なんです」

だんだん声に熱を帯びてくる心優を前に、継太はうーんと唸った。「ちよつと落ち着いて考えよう。ここには、別人格と本人は独立していて、互いの存在に気づくことはないって書いてあるよ」

心優は小さくため息を吐いた。

「そうなんです。そこが決定的な違いなんです。でも、何事にも例外はあると思います。だから、わたしみたいな多重人格の事例がないか、これから徹底的に調べてみようと思うんです」

「わかった。それなら俺も手伝うよ」

「え」と心優は目を丸くした。

「そんなに驚くことないだろ。？先生？は俺が出てくる夢を見せているんだから、無関係とは思えないんだよね」

「でも、そんな、継太さんに悪すぎます」

「いや、俺自身、気になって仕方ないんだ。乗り掛かった船だし、手伝わせてよ」

「……はい。継太さんを巻き込んでしまっただけに、ごめんなさい」

心優はぺこりと頭を下げた。

「よし」継太はパンと手を叩いてから立ち上がった。「そうと決まったら何からやろうか？とりあえず、多重人格の書かれている箇所を探せばいいかな？」

「あ、あの……」

心優はまた俯いて、体をもじもじさせた。継太は鼻から息を吐いた。

「どうしたの？もう恥ずかしがるのと謝るのは、なし」

「は、はい」

肩をびくりと持ち上げて、心優は返事をした。

しまった、強く言いすぎたかな、と継太は少し後悔した。けど、もう少し心を割らないと解決できないような気もしていた。

「継太さんと一つ実験したいことがあるんです」

「実験？」

継太の問い返しに、心優は顔を上げて「はい」とはっきり首肯した。

いま継太の左腕には、心優の細い右腕が絡んでいる。

二人は恋人よろしく腕を組んで、駅前の商店街を歩いていた。

この通りは、近くに大学があることから、牛丼店やカレー店など若者向けの飲食店が数多く点在している。下北沢には劣るものの、古着店や雑貨店などもあり、講義を終えた大学生たちを中心に多くの人たちで、狭い通りは混雑していた。

向かいから来る三人組の大学生を避けようとして、心優がぴたりと体を寄せてきた。

継太の心臓が、耳にはつきり聞こえるくらい強く打った。

左腕、肘の辺りに柔らかい感触を感じて、全神経が一点に集中した。

ブレザーに隠れていたせいもあるが、幼い顔立ちからはまったく想像もしていなかった。

心優の胸はかなり大きい。

ああ、俺はなにを考えているんだ。これは、実験なんだ。余計なことを考えるんじゃない。

継太は自分を戒めるように目を閉じ、きつく唇を噛んだ。

心優が切り出した実験とは、夢の内容を実行してみることだった。四月に継太に会ってから、僅かな間だが、声も聞こえなくなり、夢も見なくなつた。その原因を、夢の通り実行したからではないかと心優は推測したのだ。

いま心優が見ている夢は、継太と仲睦まじくデートをしている内容だ。現実で実行してみたい、という心優の提案を継太は戸惑いな

がらも受け入れた。

これは、あくまで実験。いわば、疑似デートなのだ。真面目に取り組まなければならないはずなのに、胸の大きさに気をとられるなんて……頭ではわかかっていても、再び腕に弾力のある柔らかさを感じて、思わず頬が緩んでしまった。

「道、狭いですね」

心優の不安げな声に、継太は慌てて表情を引き締める。

「そうだね。この時間はとくに人が多いだろうね」

歩き出して十分。継太と心優は体を密着させたまま、商店街の通りをそぞろ歩いた。

「そろそろ、喫茶店に入っていないかな？」

「はい。ちょうどあそこにスタバがありますね」

夢では、毎回デート場所は異なっているらしい。新宿だったり、原宿だったり、吉祥寺だったり。ときには、心優もまったく知らない場所だったりするそうだ。ただ、共通しているのが、必ず喫茶店に立ち寄ること。その店も様々で、飲んでいる物も変わるらしい。

二人は、たまたま目に留まったスターバックスの自動ドアをくぐった。

「いらつしゃいませー」

女性店員の明るい声が飛ぶなか、継太は緊張していた。

普段、喫茶店など利用しない継太にとって、注文は大きな不安だった。コーヒー以外の単語は知らず、店内に掲げられているメニューすべてが専門用語のように思えた。

一緒にいるのが水泳部の仲間たちなら、「フラペチーノってなに？」と気楽に訊けるのだが、いま隣りにいる心優には格好悪すぎて絶対に訊けない。

「キャラマキのショートください。あ、ミルク多めで」

継太には聞き取れないほど滑らかな口調で、心優は注文を済ました。さすが、私立の有名女子高に通っているだけあって、よく利用しているのだろう。

もたもたしてられない。こつちも早く注文しなければ。

「あの、コーヒーを」

「サイズはいかがなされますか？」

「サイズ？」

訊き返しながら継太は考える。そうか、マクドナルドみたいに大きさが別れているのか。

「エ、Mで」

「こちらから選べます」

店員は、まるで聞こえなかつたとしてもいうように、手のひらをレジの脇に向けた。そこには、四種類の大きさに別れたロゴ入りのカップが置いてあり、それぞれにS・T・G・Vと書いてある。これらがなんの略だかさっぱりわからないが、Mサイズなんて存在しないことは確からしい。

「じ、じゃあ、これで」

「トールですね。ありがとうございます」

会計を済ませた後、心優が注文した分も同じトレーに載せて、二人掛け用のテーブルに着き、継太はほっと胸を撫で下ろした。

「どうしました？　なんだか疲れているみたいですけど」

「いやいや、そんなことないよ。アチツ」

口をつけたコーヒーが熱くて、危うく嘔き出しそうになった。

「大丈夫ですか？」

心配そうに訊ねてくる心優に「大丈夫、大丈夫」と作り笑いを浮かべた。やはり慣れないことはするもんじゃない。左腕にはまだ胸の感触が残っているし、普段利用することのない空間はどこか緊張して、落ち着かない。

「これで、また夢を見なくなればいいんですけど。わたしたち恋人同士に見えたでしょうか？」

「どうだろうね……」

継太はゆっくり首をかしげるしかなかった。ずっと胸の感触に意識が引つ張られ、他のことを考える余裕がなかったなんて、口が裂

けても言えない。

「もし、ダメでも解決するまでは協力するから」

継太の言葉を頼もしく感じたのか、心優は力強く頷いた。

「結果はすぐに連絡します。メアド教えてもらってもいいですか？」
言いながら、心優は鞆から携帯を取り出した。

「ごめん、俺、携帯持ってないんだ」

「あ、ごめんなさい」

今度は手帳とペンを取り出して、番号を書くと、破って継太に渡した。

「継太さんはお家の電話番号をわたしの携帯に押ししてください」

心優の携帯は、淡いピンク色をした折り畳み式で、ストラップにはクマと犬の形をしたかわいいキャラクターが付けられていた。

継太は自宅の番号を押して、表示された画面に間違いないことを確認してから、携帯を心優に返した。

「ありがとうございます。登録させていただきます」

心優は、親指でパッパと操作して携帯を閉じた。これもかなり手慣れている。

「親父はたいてい家にいないから、気にしないで、いつでも掛けてきて」

継太は、コーヒーに息を吹きかけて、今度は慎重にすすった。

電話の音で目が覚めた。

継太は、布団を頭まですっぽり被って、音が止むのを待った。今日は土曜で学校は休みだ。満足いくまで寝させてほしい。

だが、電話は鳴り止んでくれない。仕方なく上半身を起こして、まず時計に目をやる。まだ七時じゃないか。こんな早朝から電話を掛けてくるなんて非常識すぎるだろう。しかも、何分鳴らし続けているんだ。しつこすぎる。

継太は、部屋を出て、電話のあるリビングへ向かった。父親はもう仕事に出掛けているようだ。

「もしもし、竹内です」

寝起きの不機嫌さを隠すことなく受話器を取った。

「お、おはようございます」

受話器の向こうから想像もしていなかった、若い女のこの声が聞こえて、継太は息を呑んだ。

「朝早く失礼します。こ、香野と申します。あの、継太さんはいらっしやいますか？」

丁寧だが、おどおどした話し方。間違いない。電話を掛けてきたのは、香野心優だ。

「待たせてごめん。継太です」

百八十度声の調子を変えて、継太は受話器に向かった。

「起こしてしまいましたよね？」

「う、うん。でも、大丈夫。もう起きるところだったから、ちょうど良かったよ」

嘘の最後に、ははは、と乾いた笑いを追加した。

「電話しようかどうかすごく迷ったんですけど、早く伝えた方がいいだろうと思って掛けちゃいました」

「どうしたの？」

「夢を、継太さんとデートする夢を見なかったんです」

「ええ！」

驚いて、声が裏返ったしまった。「本当に？」と再度確認を取る。

「本当です。最初から十日連続で見ていた夢が、昨日継太さんとデートしたら、今朝は見なかったんです」

心優が興奮しているのがわかる。夢の内容を再現させれば、夢と幻聴が消えるのでは、という心優の予想が見事的中したのかもしれない。

「声はどう？」

「まだ聞こえてきません。今日体育の授業があるので、帰ったらまた電話します」

「今日？　そうか、私立は土曜日も授業があるんだ」

「ごめんなさい、八時から授業なので、もう家を出なきゃいけないんです。自分から電話しておいて、本当にごめんなさい」

「いいよ、そんなこと気にしなくて。それより、遅刻したら大変だ。聖華は厳しいんだろう？」

「はい。ああ、わたし行きます。また、電話します！」

心優の慌てた心情をそのまま表すように激しく電話が切られた。

継太は、受話器を置くと、自然と頬が緩んだ。夢を見なかったことがよほどうれしかったのだろう。短い会話の中で、心優の想いが充分に伝わってきて、継太もうれしかった。

心優から二回目の電話があったのは、午後一時を過ぎたころだった。

「継太さん、声も、声もまだ聞こえてません」

開口一番そう言った心優は、今朝よりも興奮していた。

「今日も何度もミスしたんです。レシーブもトスもサーブも。授業中いい所なんて一つもなかったのに、一回も声が聞こえなかったんです」

バレーボールでミスを連発したことは、けっして褒められたものじゃないが、夢も見ず、幻聴もしないことは大きな成果だった。

「本当に良かったね。これで解決できたのかな？」

「わかりません。でも、そんなに甘くはないような気もしているんです。だから、これからも自分なりに夢と幻聴の原因を調べていくつもりです」

「それじゃ、今日も図書館に行く？」

「今日はこれから英会話部があるんです」

「へえ。英語好きなんだ」

「いえ、勧誘されたときに断り切れなくて。活動が土曜日だけなので苦にはなっていないんですけど、先輩たちがすごすぎて圧倒されています」

「じゃあさ、今度会ったときは、英語話してよ」

「ええ！ そんなの無理ですよ」

「そんなに嫌がることないじゃん」

継太はクスクス笑った。釣られて心優も笑った。

「またなにか変化があったら教えてくれる？ 協力できることはしたいからさ」

「はい。そのときはすぐに。ではまた」

電話を切って、継太は背伸びをした。迷っていたが、今日も図書館に行くことに決めた。

中間考査が来週に迫っていた。

ほとんどの部活がテスト休みに入っても、水泳部には関係ない。毎日クラスで顔を合わせている悠希の肌がだんだん日焼けしてきている。先週から晴天が続いていて、気温もぐつと上がってきたから、水に入っている時間も長くなってきているはずだ。

「幽霊部員の継太さんは、気楽なものね」

ホームルームが終わると、いつもは脇目もふらずに部活へ向かう悠希が、今日は継太の席に近づいてきて、嫌味をちくりと刺した。

「初めてゴールデンウィークも堪能したし、テスト休みまであるなんて夢のようだね」

継太は目も合わせずに、鞆の中に教科書類を詰め込んだ。

「学校終わったら、毎日なにしてるの？ 夢の生活の中身を教えてくださいよ」

「どうしたんだよ、急に。そんなに俺のことに興味があつたわけ？」鞆のファスナーを閉じながら意地悪く言った。またなにかいちゃもんをつけられると思ったからだ。

ところが、悠希は返す言葉に迷ったように、下唇を噛んだ。

「もういい！」

悠希は怒りに満ちた声で言い放つと、継太に背中を向けて教室を出て行った。

「何なんだよ」

首をかしげながら、今度はスポーツバッグからジャージを取り出した。放課後に教室で着替えて、図書館までのジョギングがすっかり習慣になっていた。

「まーた、夫婦喧嘩か。飽きもせずによくやるなー」
にやにやしなながら道野が近寄ってきた。

「その夫婦喧嘩って言い方はやめろ」

「そんなにカリカリするなよ。事実なんだから仕方ないだろ」

「お前なあ」

継太は眉をしかめて、道野を睨んだ。だが、道野はいつそうにやけ顔を強めて、継太の耳元で囁いた。

「そんなんじゃ他の男に取られちまうぞ」

囁き声があまりに気持ち悪くて、継太は咄嗟に体を仰け反らせた。
「なに言ってるんだよ。気持ち悪いな」

継太が露骨に嫌そうな顔を見せると、道野は大きく口を開けて高らかに笑い始めた。

「前も言っただろ。早坂は人気あるって。おちおちしていると、竹内の今の座も危ないってこと」

「お前まで勘違いしてるのかよ。俺と悠希はなんの関係もない」

継太はため息混じりに言った。三年生になってから悠希とはケンカばかりしているのに、どこをどう見れば、恋人同士に見えるのだろうか。

「へえー。それじゃ、仮に俺が早坂に手を出してもいいんだな？」

継太は鼻で笑った。もちろん「好きにしろ」と言ってるつもりだった。ところが、突然喉の奥が、ぐっと締めつけられたような感覚に襲われ、声が出なかった。

継太が喉元に手をやって、顔をしかめっていると、道野がしたり顔を作って、

「ほら、やっぱイヤなんじゃないか」
と肘で小突いてきた。

継太は喉のいがいがをとるように、何度も喉を鳴らした。

「痛いからやめろ」

ようやくまともな声が出た。と同時に、何度も小突いてくる道野の肘を手で払いのける。

「おー怖い怖い。イヤだねえ、男のジエラシーって」

道野は、怖がるように両肩をすぼめて腕を胸の前で交差させた。人をおちよくるようにすぼめた口が、また継太を苛つかせる。

「結局なにが言いたいんだよ」

明らかに怒気を含んだ継太の物言いに、さすがにまずいと感じたのか、道野は少しだけまじめな顔になった。

「早坂はな、竹内のことを心配してんだよ」

相変わらず、顔を近づけて小声で言った。

怪訝そうに眉根を寄せる継太に、道野は言葉を続けた。

「最近さ、教室でジャージに着替えてからどこ行ってた？ 水泳部辞めたお前が、毎日ジャージ着て、帰るっておかしくないか」

「それは……」

継太は答えに迷った。わざわざここから五キロ以上も離れた図書館に走って通っているとは言いづらい。必ず道野は「なぜ？」と疑問を口にするだろう。そのとき、香野心優の不思議な体験を説明し、その原因を調査しているとは口が裂けても言えない。彼女は、自分を信用して話してくれたのだから。

「運動不足解消のために、家まで走って帰ってるだけだよ」

前半は真実だが、後半は完全に嘘を吐いた。図書館という単語を出しただけでも、道野なら興味本位で「俺も行く」なんてことを言い出しかねないからだ。

「へえー、どっかに寄り道するわけでもなく、ただ真っ直ぐ家まで走って帰ってたんだ？」

継太は一瞬ぎくりとした。まさに、図書館通いは、その寄り道だった。でも、大丈夫だ。動揺の色を顔には出さなかったはずだ。

「そう。ただ走って帰るだけ。寄る所なんて別にないよ」

目を細め、ふーんと明らかに疑った返事を返す道野。まさか、最

初から図書館に通っていることを知ったうえで、訊いてきたのではないだろうか、と継太は不安になった。

「そうか。それならいいんだが、ちょっとした噂を耳にしたもんだから」

「噂？」

「聖華女子のゴト、お前がデートしてるところを見たってヤツがいるんだよ」

「ええ！」

継太は思わず大声を上げてしまった。図書館通いどころか、あの日、心優と行った仮想デートの現場を目撃されていたのだ。

「その反応からすると、噂は本当みたいだな」

道野はにやりと口角を上げる。

どうすればいい？ 脳みそをフル回転させるが妙案は思い浮かばない。やはり、嘘でもここは白を切り通すしかないと継太は思った。

「あれは、従妹（じゆてい）だよ」

「従妹？」道野は片眉を上げて聞き直した。継太が頷くと「でも、従妹と腕を組んで歩くか、普通」

至極まっとうな指摘だ。だが、ここで怯むわけにはいかない。

「確かに二人で並んで歩いたけど、さすがに腕は組んでないよ。あそこは道が狭いからさ、腕を組んでいるように見えただけだろ？」

まったく尾ひれをつけて噂を流すのもいいかげんにしてほしいよ」

ふーんとまったく信用していない返事を道野は再び返した。まあ、昼ドラに登場するベタな言い訳を信じる、というほうに無理がある。

「俺と悠希の関係もただの噂だし、聖華女子のゴも従妹（じゆてい）だけ。噂って所詮そんなもんだ」

「ま、噂の真偽はともかくとして、この噂が広まるのもそんなに時間は掛からないってことは確かだな」

それが噂の一番厄介で怖いところなのだ。しかも、今回は心優が絡んでいるだけにさらに頭が痛い。

「これは俺の推測でしかないが、もう早坂の耳には入ってるんじゃない」

ないか？ 否定するなら早いうちにおいたほうがいいぞ」

「まあ……悠希から訊かれたら否定はするけどさ。俺からその話をするのも変じゃないか？」

「全然」と道野は力強く頭を左右に振った。

「そ、そうか」気圧されるように継太は曖昧に頷いた。

「でも、早坂も早坂だよなあ。気になつてるなら素直に訊けばいいのに。竹内がモテることくらいわかつてるはずなのになあ」

「は？」

顔をしかめる継太をよそに、道野は背中を向けた。

「まったく、お前らは二人とも鈍感すぎるんだよ。じゃあな」

「おい、ちよつと待てよ」

継太の呼び止めには応じず、道野は背中を向けたまま一方的に手を振って見せると、教室を出て行った。

図書館に着いたが、心優はまだいなかった。すっかり二人の定位置と化した二階の一番奥、窓際の机に継太は荷物を置いた。それから、昨日、図書館を出る前、最後に目を付けていた本を取りに本棚まで行った。本当は、借りればいいのだが、これ以上鞆を重くしたくない継太は、本は借りずに毎回棚に戻していた。万が一、どこかの物好きに借りられていた場合は、他の本を読めばいいだけ、とう気楽さもあった。

無事、目当ての本は昨日と変わらない場所にあった。タイトルは『正夢を見た世界の人々』。机について、読み進めてみると、これまで過去に、夢により地震を予知した人や、事故を回避した人々のエピソードがそれぞれ章ごとに書かれていることがわかった。だが、科学的な説明は皆無で、ただ不思議な出来事である、という内容のようだ。

オカルトファンには、垂涎の一冊だろうが、継太が求めているのは、正夢の根拠だ。とりあえず、最初の二つ、メキシコ人とスペイン人の話を読んだところで、棚に戻すつもりで本を閉じようとした。

だが、三人目、アメリカ人女性について書かれた章タイトルを目にしたとき、思わず開いたページに顔を近づけた。

『正夢が彼女を天才数学者へと変えた』

夢、天才数学者……まさかと胸が高鳴った。継太は、心臓の早鐘に合わせるように、並んだ文字を目で追った。

一九五九年、コネティカット州の片田舎に住む一人の主婦が、地元新聞紙に取り上げられた。

その内容は、三人の息子を持つ平凡な主婦、ジェシーさん（五〇歳）が、コロンビア大学が設けている数学の研究機関に特例で入所を認められたというものだった。

一年前、ジェシーさんは、長男が大学受験のために使っていた数学の過去問集を何気に開いたところ、すらすらと頭の中に答えが浮かんで来たという。ジェシーさんは、三十年以上前に高校を卒業してから数学には一切触れていなかった。それどころか、数学が一番嫌いな教科であり、危うく留年しかけるほど、苦手にしていた。ところがいま、どういふわけか問題が解けてしまうのだ。彼女は、本屋でコロンビア大学やマサチューセッツ工科大学といった全米屈指の名門校の問題集を購入し、問題に向き合った。結果は同じだった。少しも迷うことなく答えが浮かんだ。まるで、神のお告げを聞いているようだった、と後に彼女は親しい友人に漏らしている。

彼女の長男からこの不思議な話を聞いた数学の担任が、問題を用意した。それは、高校数学の範囲を跳び越え、数学を専攻している大学生たちが取り組むような難問だった。さすがに、これには「神のお告げ」も聞けず、肩を落としてその日は眠りについた。彼女の奇蹟もここまでかと思われたのだが、翌朝、彼女は朝食を作るのも忘れ、レポート用紙五枚に解答をまとめた。それを長男に持たせて担任に見せたとこ見事正解であることがわかった。驚愕した担任が、すぐになぜ解けたのか彼女に訊ねたところ、彼女は、夢で解答を知ったという。夢の中で、知らない老人が羊皮紙に一心不乱にペンを走らせている。数式が並び、さっぱり書いている内容はわから

ないが、不思議と目が覚めた後も頭の中に鮮明に残っており、それをそっくりそのままレポート用紙に書き写したそうだ。だから、解答が正解しているかどうかもまったくわからないし、当然解説もできないと語った。

そう簡単に信じられる話ではない。担任は、他にも何問か問題を彼女に渡した。そして、翌日、正解の書かれたレポート用紙が長男を通じて手元に戻ってくるのだった。

このことを担任は大学時代の師であるレスター教授に報告した。興味を持った教授はジェシーと何度か面接と試験を繰り返した後、コロンビア大学の研究機関への入所を推薦したのだった。

入所後、すぐに彼女は画期的な論文をいくつも発表し、数学者たちを驚嘆させた。彼女なら四百年以上解かれていない「フェルマーの定理」をも解けるのでは、ということすら囁かれたほどだ。しかし、彼女には決定的な欠陥があった。論文は書いても自分ではまったく説明ができないことであり、他の数学者たちからの質問の意味さえわからなかった。

数学者たちの彼女に対する懐疑心、猜疑心、そして嫉妬は瞬く間に燃え広がり、やがてバッシングへとつながった。「説明できないのであれば証明をしたことにはならない」「数学者として失格」「給料泥棒」などなど。

精神的に追い込まれたジェシーさんは、大学を去り、コネティカット州の実家へ戻った。しかし、彼女の元には、数学ファンから毎日多くの難問が送られてきたのだった。もう数学には触れたくないジェシーさんだったが、一瞬でも問題を目にしてしまうと、その夜、解答を夢で見るという状態が続いた。

やがて、彼女はノイローゼ状態に陥り、とうとう自ら死を選らんでしまった。彼女が不思議な夢を見るようになってから、僅か一年三ヶ月後のことであった。

死を選んだ……自殺……死……。

本を読むまでまったく予期していなかった単語がぐるぐると頭の

中を駆け巡った。

「継太さん、継太さん」

ふと我に返った継太は、びっくりと首を竦めた。顔を上げると不思議そうに継太を見つめる心優の顔があった。

「ああ、ご、ごめん、来てたんだね、気づかなかった」

言葉を詰まらせながら継太は適当に挨拶した。

「なに読んでたんですか？」

心優が手元の本を覗きこむように訊いてきた。反射的に継太は本を閉じて、

「こ、これ？ 読んでみたけどただのフィクションだった。まったく役に立たないよ」

「そうなんですか。ちょっと見せてもらってもいいですか？」

本に手を伸ばす心優をかわすように、継太は自分の胸元にたくぐり寄せた。

「いいよ、いいよ。時間の無駄だよ」

声を裏返らせながら継太は立ち上がった。足早に心優の脇をすり抜けて、本棚まで行くと、胸に手を当てて、ふうつと一息吐いた。心臓の鼓動が速い。本のショッキングな内容に動揺していたところに、突然心優が現れたものだから、かなり焦ってしまった。心優から逃げるようにして席を立ったから、行動を不審に思われなかっただろうか。

心優との類似点の多さに、最初は掘り出し物を見つけた気分だった。しかし、結末がノイローゼになって、自殺したなんて心優にはとても見せられない。余計な不安を与えてしまうだけだ。

継太は額に汗まで浮かんでいることに気づいて、袖で拭いた。まだ心臓の早鐘も収まっていない。だが、このまま本棚の前に居続ければ、心優が様子を見に来るかもしれない。そうなれば、本の位置を知られてしまう可能性が高まってしまう。とにかく、ここから早く移動したほうがいい、と継太は判断した。

こういうときに便利なのが、やはりトイレだ。席に戻るのが遅く

なつても、トイレに行つてたと腹をさすりながら言えば、立派な言い訳になる。

継太は蛇口を捻つて、水を何度も顔にかけた。水の冷たさが、汗を引かせ、心を落ち着かせてくれる。タオルは鞆に入れてしまつてゐるため、仕方なくポケットから取り出したハンカチで顔を拭いて、鏡で念入りに水滴が残つていないか確認した。大丈夫だ、と判断した継太はようやく席に戻ることにした。おそらく、席を立つてから十分以上は経つてゐるはずだ。これ以上の離席はさすがにまずい。

席に戻ると、心優が背中を丸くして悄然としていた。まさか、と思いつつ平静を装つて声を掛けた。

「どうしたの？ 元氣ないじゃん」

「あ、ごめんなさい」

やっと戻つてきた継太に気づいて、心優は背中をピンと伸ばした。もう何度も図書館で会つてゐるのだが、相変わらず継太の前では彼女は緊張した様子だった。

心優の手元には、一枚のA4用紙があり、ところどころにピンクの蛍光ペンで線が引かれている。

「それ、もしかして中間考査の」

継太が言い終える前に心優は「そうです」と答えて、一つため息を吐いた。

「今日、ホームルームの最後に発表されたんですけど、いま改めて確認してみると、想像していたよりもずっと試験範囲が広がって……」

心優は語気弱く、もう一度ため息を吐いた。

「見せて」継太は、うなだれる心優から用紙を受け取つて、目をやるなりすぐに顔を歪めた。まず驚いたのは、科目数の多さだ。数学だけで四科目、英語は三科目。しかも、継太が二年生のときに習つた内容も数多く含まれている。四日間の日程で組まれてあり、継太の高校よりも一日多い。

「これは、すごいね。とくに数学と英語」

苦笑いを浮かべながら心優に用紙を戻した。

「数学と英語は、一年生のうちに高校の範囲をすべて終えるカリキラムになってるんです。毎日の授業のスピードについていくのがやっとで、四月の最初に学んだことなんて、もう大昔のことみたいで……」

継太も去年までは、水泳部の練習で試験勉強がおろそかになり、一夜漬けどころか半夜漬けの状態で臨んでいた。苦手な科目は、赤点さえ取らなければ良いと勝手に開き直ってさえいた。

「一年時の成績が、二年生のクラス替えに反映されるんです。それぞれのクラスが、『東大・医学部クラス』や『早慶上智クラス』って言われてて、もう進路が決まっちゃうんです」

「ああ、やっぱり名門校は厳しいんだね」

これまで二年間、甘い考えでいい加減にテストをこなしてきたことを今更ながら反省した。

「それで、友達と話し合ってたんですけど、明日から一緒に勉強することにしました。得意教科がそれぞれ違うから助け合えると思って」

心優は申し訳なさそうに言った。今日いつもより心優が図書館に遅れて来たは、放課後、試験対策について仲の良いクラスメイトたちと知恵を出し合っていたからなのだろう。

「そうだね。これからは、お互い中間考査に全力を尽くそう」

継太は笑顔を向けた。幻聴も夢も消えたままである今、これ以上原因を調べることは却って不安を与えるだけかもしれない。それよりも一心不乱になって勉強に集中すれば、もう夢のことなど気にする余裕もなくなり、一番の治療になるのではないだろうか。そのためには、今度の中間考査が良い機会になるのでは、と継太は考えた。「俺も丁度今回の中間考査は、良い点取りたいって思ってたんだ。図書館で勉強すればはかどるってことも君のお陰でわかったから頑張れるような気がするんだよね」

「いえ、そんな、わたしはなにもしてません」

心優は恥ずかしそうに手のひらを左右に振った。

「よし、そうと決まったらすぐに始めよう。まずは、借りている本は全部返却して、これからはテストのことだけを考えるんだ」

継太は心優の隣の椅子に置かれたトートバッグを持ち上げた。ずしりと重い。中には、多重人格障害や統合失調症について書かれた分厚い本が詰め込まれている。心優みたいに華奢な体のコが、こんな重いものを毎日肩に提げて移動していたのかと思うと、胸が締め付けられた。

「はい。これだけいろんな本に目を通して結局原因ははっきりしませんでしたし、昨日の検診でもやっぱり問題ないって、お医者様には言われたので、もう心配しないことにします」

継太の意図をすべて汲んだかのような発言を心優は自分自身に言い聞かせるようにした。

本を返却して、心優はすぐに図書館を出るかと思ったが、せつかく来たからということ、いつもの午後六時まで一緒に勉強して帰ることになった。

継太が英語の試験範囲である仮定法の問題に頭を悩ませているとふと問題を覗きこんだ心優が「あの、いいですか？」と遠慮がちに断ってから、答えの解説をしてくれた。継太が初めて仮定法を習ったのは、二年生の一学期だと思うが、聖華女子では高校入試で出題されるといふ。つまり、中学のうちに塾で学んでいるというのだ。

継太は、へえーと舌を巻いた。

「やっとな継太さんのお役に立てたみたいでうれしいです。英語は得意なほうなので、もしなにかあったら携帯に電話ください」

心優は本当にうれしそうに微笑んだ。

「ありがとう。心強いなあ」と継太は答えたが、そんなことをすれば、彼女の勉強の邪魔になるだけで、電話を掛けることは絶対にはいはずだ。それに、彼女が本当に夢のことを忘れるためには、夢の登場人物である継太自身ともうこれ以上会わないことが絶対条件ではないだろうか、とも考えた。

だが、継太はその提案を口に出せなかった。できれば、これから

も図書館でこうして心優と会いたいと思った。

「それじゃ、また」

「はい、今日も付き合っていたいてありがとうございます」

午後六時、いつも通り心優はお礼の言葉と一緒にぺこりと頭を下げてから、駅の改札口を抜けて行った。

心優の背中が見えなくなったところで、継太は、一つため息を漏らした。心優が夢のことを忘れるということは、もう彼女が図書館に通う理由もなくなるということだ。

もしかしたら、もう会うことはないのかもしれない。そう思うと、なんだか息苦しくて、帰りの十キロのジョギングが、いつもよりずっと長い距離に感じられて、いくら汗をかいても、ちっとも爽快な気分になれなかった。

桜橋高校の中間検査は、十八日から始まった。継太は、試験前も試験中も図書館に通い続け、テスト勉強を行った。これまで平均点を下げ続けてきた数学と古文は、帰宅してからもたっぷり時間を割いた。

その甲斐あってか、三日間のテストが終了したとき、はっきりとした手応えを感じていた。

テストが終了した日も図書館には行くつもりでいた。しかし、荷物をまとめて席を立った瞬間、軽い立ちくらみが襲ってきて、慌てて机に手をやって、体を支えた。

右手の親指と人差し指で、目尻を押さえながら、継太は自嘲するようにふつと鼻で笑った。

泳がなくなると、すぐに体力が衰えて少し走っただけで息を切らしてしまう始末。やっと最近ジョギングのお陰で少しは戻ったかと思っていたのに、今度はテスト勉強に力を入れた途端にこれだ。

「おい、大丈夫かよ？」

道野が心配そうに眉間に皺を寄せて、訊いてきた。ずいぶん大げさな顔だと思っ、継太は吹き出した。

「大丈夫だよ。そんなにやばかったか？」

「完全に体がふらついてたじゃねえか。ちょっと焦っちまったよ。なあ、早坂」

道野が首だけを右に捻った。その視線の先、机一つを隔てたところに、悠希が立っていた。

廊下側の席の悠希が、いつの間にか窓際の継太の席すぐ近くにいたのだ。

「……………」

悠希は、道野から話を振られても口を開かなかった。ただ、じつと鋭い目つきで継太を睨めつけていた。

「おい、どうしたんだよ？ そんな怖い顔して」

たまらず継太が茶化すように言っていると、悠希は、声には出さず、唇だけを僅かに動かしした。継太にはその動きから「ばか」とはつきり読めた。

「は？」

継太が顔を歪め声を裏返しても、悠希は背中を向けて、教室を出て行ってしまった。

「また一人で不機嫌になってるよ」

呟いた継太の横で、道野がくすくす笑っていた。

「いやー、それにしても速かったなあ。一瞬でもうここまで来てたもんね」

道野は感心するように言って、悠希が立っていた位置を指差した。「大げさすぎだろ？ ほんの少しふらついただけじゃないか」

道野は、左右に首を振りながらポンポンと継太の肩を叩いた。

「だから、それだけ早坂は、お前のこといつも気にしてるってことだよ。ほんと幸せなヤツだなあ」

「いや、たまたまだろ」

「さあて、部活なあ」

継太の言葉が終わらないうちに、道野は両手を上げて、体全体で伸びをしてから、じゃ、あんまり無理すんなよと一言残してから教

室を後にした。

継太は首をかしげた。とくに体調が悪いとは自分では思わない。ただこの一週間、一日の平均睡眠時間が四時間弱であることを考えると、今日は、真っ直ぐ家に帰って体を休めたほうがいいかもしれない、と継太は思った。

翌日の土曜日は朝から大雨だった。窓を叩くほどの強い雨にさすがに図書館に行くことはためられた。テストが終了したばかりでとくに宿題も出されていない。週末は休んでもいい、という教師たちからの配慮だろう。

腹時計が鳴って、継太は冷蔵庫を開けた。時刻は午後一時。少し遅めの昼食の準備に取り掛かった。

ちょうど今ごろ、聖華女子では、中間考査の終了を迎えたはずだ。心優のテストのできはどうだったのだろうか。不安と焦りで押し潰されそうになっていた心優の顔が浮かんで、継太は電話したい衝動をぐっところらえた。

昨晚の残り物でチャーハンを作った。米粒はパラパラで、塩加減もちょうどいい。我ながら上出来だ、と納得のいく味だった。スプーンで最後の一口をかきこんだとき、電話が鳴った。

継太は文字通り飛び上がるように椅子から立ち上がって、受話器に飛びついた。

「もしもし」

「お、父さんだけど……なんでそんなに息切らしてるんだ？」

聞こえてきたのは、聞き慣れた父親の声だった。継太は「なんだ」と吐息とともに声を漏らした。

「なんだってなんだ。なんかあったのか？」

「いや、なんでもないよ。どうしたの？ また晩飯いらないうって話？」

「ご名答。今日も遅くなりそうだから、外で食べることにするよ」
数日前から原稿の整理に追われているらしく、深夜帰宅が続いて

いる。夕食が必要ないときは必ず電話をくれるから父親からの電話は珍しいことではない。それなのに、電話が鳴った瞬間、継太の頭には心優のことしか浮かんでなかった。

何を期待してるんだ、と自分を諫めるように頭を一振りしてから受話器を置いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4253p/>

さんかく + 1

2011年8月16日03時20分発行